



特攻観音堂・駒繁神社澤田浩治宮司による修祓の儀



特攻観音堂内・太田賢照山主による願文奏上

第65回特攻平和観音年次法要



第112号

公益財団法人 特攻隊戦没者 慰霊顕彰会

〒102-0073 東京都千代田区九段北 3-1-1靖国神社遊就館内・地階

電話 03 (5213) 4594
FAX 03 (5213) 4596

<http://www.tokkotai.or.jp>

振替口座 00140-6-59580

編集人 飯田正能
発行人 石井光政
印刷所 ヨシダ印刷株式会社

第65回特攻平和観音年次法要... 靖国神社は日本のアール・ド・トーンである。平成28年度、義烈空挺隊慰霊祭に参列して、北方領土と終戦後の日ソ戦、ユダヤ難民を助けた日本人と八紘一宇の精神。平成28年度第61回高野山慰霊祭に参列して「忘れないで」という想い。シアターDACC第50回公演

17 16 11 9 7 1

『失われた過去を求めて ああ！陸軍飛行学校桶川分教場 (特攻隊) を観て』
「レイクエム・知覧の花」の紹介
「講義録」特攻で散華された先輩・戦友の志(前編)
世田谷山観音寺・特攻平和観音同(後編)
世田谷山観音寺・特攻平和観音同(後編)
事務局より
①天一號にぎり
②「特攻の母」の孫・赤羽調さんと「薩摩おじよ」
③台湾の国家人権博物館
事務局からの報告等
393938 37 34 2721 20 18

日時 平成28年9月22日(木)

秋分の日 14時~15時20分

場所 世田谷山観音寺・特攻観音堂
参列者 御遺族36名を始め御来賓37名
会員約145名、他に当日受

式次第

付けの一般参列者20数名、合計約240名

司会 大穂 園井
倉形 寛

梵鐘点打 3回

式衆入堂

世田谷山観音寺山主他
駒繁神社宮司

国歌斉唱

トランペット 堀田 和夫

山主願文

特攻平和観音経

神儀

世田谷山観音寺山主 太田 賢照
駒繁神社宮司 澤田 浩治

修祓の儀・降神の儀・献饌の儀
祝詞奏上・玉串奉奠・撤饌の儀

祭文奏上

公益財団法人 特攻隊戦没者慰霊顕彰会

挨拶

理事長 藤田 幸生
理事 保坂 展人

献吟

世田谷区長 保坂 展人
一誠流吟詠 吉野 一心
龍笛 逢坂 龍信

奉納献奏

甲飛喇叭隊第11分隊 隊長 原 知崇

慰霊献歌

全員合唱
トランペット 堀田 和夫

玉串奉奠

顕彰会会長、世田谷区長、御遺族・御来賓代表

焼香

特攻隊戦没者慰霊顕彰会

式衆退堂

池前祭 山主 読経、神官 修祓・祝詞奏上後、式衆退場

直会

15時30分~16時30分

献吟

第七二振武隊 荒木 幸雄作
昭和20年6月3日沖繩南部海面で戦死

君がため世のため何か惜しからん

空染む屍と散りて甲斐あり

神風特別攻撃隊七生隊

昭和20年4月29日沖繩北端90度70哩海域で戦死

ちよろずの神の持たせる命なり

砕きて守れ大君と国

目次

第65回特攻平和観音年次法要

平成28年9月22日(木) 秋分の日、世田谷山観音寺・特攻観音堂において、第65回特攻平和観音年次法要が厳粛、盛大に斎行された。

今年の秋分の日は、例年の23日ではなく、22日であった。今年は4年に1度の閏年である。4年前の平成24年も22日であったが、天文学の計算上では今後2044年までの閏年は22日になるそうである。

今年は天候が不順で、週間天気予報では、当日は台風の接近が予想されるような状況であったが、幸い台風は速度を速めて通過した。しかし、「台風一過の秋晴れ」を期待したが、期待に反し、秋雨前線の停滞により朝からかなり強い雨が降る状況であった。



祭文奏上・藤田幸生理事長



御挨拶・保坂辰人世田谷区長



献吟・吟 吉野一心、笛 逢坂龍信両氏



奉納献奏・甲飛喇叭隊第11分隊、隊長原知崇氏

準備作業中にも、一時的に降り方が弱くなる時もあったが、激しく降る時もあり、遺族・来賓席用テントの前に水溜まりが出来たり、一般受付用のテントの前には深さ2〜3cmの流れが出来有様であった。そのような状態ではあったが、各担当者は粛々と準備作業を進め、予定時間内に斎行準備を完了させた。

受付開始時刻は13時であったが、その頃になっても雨は降り続いていた。参列者には高齢の方が多いので、参列を取り止める方が多いのではないかと予想したが、予想に反し、ほとんどの方が参列され、境内に用意した9張りのテントは、ほぼ満席となった。法要開始間際になっても雨が降り続き、今年は雨中の斎行かと思われたが、不思議なことに、梵鐘点打とともに、それを合図にしたように雨が止んだ。ありきたりの言葉ではあるが、「在天の英霊の御加護」を強く感じた瞬間であった。

法要は、式次第に則り粛々と進められ、池前祭の終了をもって滞りなく終了した。

直会の準備は、事前の綿密な計画により素早く完了し、予科練雄飛会会長小林和夫氏のご発声による献杯の音頭により開始された。

奇跡的に雨が止んだためか、例年より参列者の話が弾んでいるようであったが、やがて定刻となり、直会はお開きとなった。

年次法要の内容等については、例年とほぼ同様なので、詳細は割愛させていただきます。今回は年次法要斎行の支援について紹介させていただくことにする。

支援組織は、当顕彰会、隊友会などからの支援員約50名で組織されており、本部長衣笠陽雄専務理事の下に、本部、受付部、案内部、式典支援部の4部で構成されている。更に直会準備のため、各部員は4グループに分けられ、担当地区が割り当てられている。法要当日、各部長は10時に現地に集合し、本部長の指示を受けた後、10時30分までに集合した各部員を把握し、担当業務の説明、確認を行うとともにそれぞれの業務を開始した。

11時、各部の準備作業が一段落した頃、直会準備担当グループは、それぞれのグループ長の下に集合し、所要物品の確認、配置要領等の現地説明を受けた。12時までに、各準備作業は完了し、各支援員は、昼食として「戦闘配食」を頂いた。「戦闘配食」とは些か大袈裟ではあるが、これは、昭和16年12月8日に、真珠湾攻撃の航空母艦瑞鶴の乗組員に戦闘食として配食された五目飯の握り飯とベーコンをメインにし、昭和16年当時の中攻隊(中型陸上攻撃機部隊)の機上弁当の中から巻き卵とグリーンピースを、海軍調理術教科書の中から中華料理の火鶏丸(ホーチーワン)を合わせて再現した特別メニューであり、午後からの本番を迎えるに当たり、気を引き締めるには丁度

祭文

本日ここに、第65回特攻平和観音年次法要を迎えました。御遺族、戦友、有志一同が、ここ世田谷山観音寺境内に集い、謹んで在天の特攻隊員の御霊に申し上げます。

皆様方は、70有余年前、我が国土と民族の安泰を願ひ、空に、海に、陸にと、来襲して来る敵に対し一身を投げ打って敢然と突入、散華されました。これは正に、自己の命に代えても祖国、家族等を護るという一念から発した、日本人の類稀なる精神文化の真髓が発揮されたものであります。今を生きる私達は、国を挙げて、生ある限り、皆様のことを、子々孫々に至るまで語り伝えていかなければなりません。

私達人類は、あのような度重なる困難な時代を経て、多くのことを学んできたはずであります。それにも拘わらず、今も人の世は、国の内外を問わず、極めて混乱した事態に陥っております。それらは、陸上においては、IS「イスラム国」による自爆テロ等による混乱の拡散、ロシアによるクリミア侵攻、大陸内部におけるウイグル、チベット民族の弾圧、及びそれらに伴う難民の移動等、また、海上においては、アデン

湾等における海賊行為、中国による南シナ海における国際司法裁判所判決を無視した活動等、海上交通の自由と安全が脅かされる事態が多発、横行しております。更に、航空宇宙、サイバー空間の国際法未成立の新しい分野においても、他国の人工衛星の破壊やサイバー秩序の攻撃破壊等、新たな脅威が発生してきております。

一方、米国の国際社会における相対的地位は、益々低下し、新興勢力中国の台頭による旧国際秩序への挑戦が、各分野において顕在化してきております。このため、EU、NATO等ヨーロッパ諸国の秩序も大きく揺らぎ、国際社会は総じて混乱増大のさなかにあります。しかし私達は、これら諸問題に対する明確な解決の手段を見出し得ていないのが、実情であります。

我が国及びその周辺においても、例外ではありません。日本と中、韓、露国それぞれの間における領土問題、中でも東シナ海における中国の尖閣諸島領有権主張、海中資源探査採取の強行、日本海における北朝鮮のミサイル発射、核兵器開発の強行等、防衛白書を見るまでもなく、日本に対する法や協定を無視した脅威が、日増しに増大、強大化していることが肌で感じられるところであります。

このような状況は、正に、数十年の

歴史を繰り返しているのでしょうか思えます。であるが故に、私達国民は、国家の尊厳を保ち、生き抜いていくために、今こそ特攻隊の皆様のことへ思いを致し、その事実から、知恵と、忍耐と、覚悟と勇気を学び、抑止の力を整えるべきときであると痛感しております。

しかしながら、最近の国内世相を眺めますと、あらゆる分野で、自分以外のことに尽くすという公の精神が失われ、人として自分を磨くことを忘れてしまっているように見受けられてなりません。少子高齢化の急進、人倫に悖る行為の多発等から、「人が、強く正しく生きること」、「子孫を未来に残すこと」という生き物としての根幹に、狂いが生じているのではないかと憂慮せざるを得ません。

そのような中で、昨年戦後70周年に当たり、安倍総理は、戦前、戦中、戦後を総括され、これから日本が歩むべき道として、「国家繁栄こそ平和の礎」であり、今後とも「積極的平和主義」を国是として追求していくことを誓われました。そして、立法、外交、経済面等で、実行に移されてきました。

天皇陛下におかせられましたも、今年になって、戦後の象徴天皇としての在り方を、国民に問われました。このように、我が国の、世界の中における佇いが、大きく変わろうとしておりま

す。これらの変化は、あるいは、英霊の皆様が望んでおられた方向ではないかと拝察しております。

当顕彰会もまた、会員の高齢化による減少や国民の慰霊顕彰に対する関心の薄さ等、厳しい状況に置かれております。役員など活動を担う関係者は、新しい世代に交替してきております。そうしてその中で、新しい発想のもと、若い会員の勧誘に努め、「あ、特攻勇士之像」の各県護國神社への建立奉納事業や、特攻作戦の事実を後世に正しく伝えてゆく努力を継続して参る所存であります。私達は、皆様方への慰霊顕彰活動が、我が国の再生の一助になることを信じ、活動の継承、強化を誓うものであります。

在天の御霊、どうか私共をお導きください。皆様のことを、決して忘れてません。感謝申し上げます。そして、皆様に恥ずかしいくないよう、よりよい社会を作るために努力することをお誓い申し上げます。

どうか安らかに眠ってください。
平成28年9月22日

公益財団法人

特攻隊戦没者慰霊顕彰会

理事長 藤田 幸生

御挨拶

第65回「特攻平和観音年次法要」の開催に当たり、御挨拶を申し上げます。

今年は相次ぐ台風の上陸など天候が安定せず、集中豪雨により、岩手県を始め全国で被害がありました。亡くなられた方々と被害に遭われた皆様に謹んでお悔やみとお見舞いを申し上げます。

本年も「特攻平和観音年次法要」がやってまいりました。

昨年は、「戦後70年」の節目を迎えましたが、長年にわたって年次法要を支えてこられた皆様の御努力に対し、心からの敬意を表するものがあります。

私は、身の引き締まる思いで、この式典に臨んでいます。先の大戦において、その短すぎる青春の最なか

良い内容かと思われた。
受付け開始は、13時からであるが、早い方は、12時半頃から来場されるので、それに合わせて受付けを始めた。受付けは、受付部が担当し、御遺族、

捧げます。

短すぎる生涯を終える時、親兄弟を案じ、国のためにと散って逝った苛烈な場面に思いを寄せる時、壮絶な最期を遂げた姿に胸が一杯になります。残された家族、親族の皆様、戦地で苦楽を共にされた旧友の皆様、その御心痛ま

戦後71年となつて、特攻隊員の御遺族も高齢化し、こうして年次法要に足を運ばれる方々も、年々少なくなつて

今年、リオデジャネイロでオリンピック・パラリンピックが開催され

今年、リオデジャネイロでオリンピック・パラリンピックでは世田谷区にゆかりの選手も多数参加し、11人のメダリストも誕生しました。また、パ

御来賓、一般、及び当日受付けに分けて実施された。

受付けを済ませた参列者は、案内係員により所定の席に案内された。

司会、式典進行の支援は、式典支援

が誕生しました。

私たちの生きるこの時代に、特攻隊員と同世代の日本の若者たちが、世界の舞台でのびのびとはばたける素晴らしい感動を覚えます。

先の大戦で尊い犠牲となられた先人たちが築いた礎があつてのことと思います。これからの若者たちが、夢をあきらめず、全力で追いかけることができるよう、過去の戦争を次の世代に伝え、平和であることの価値をしつかりと守ることが、私たちの使命と改めて心に刻みたいと思います。

かつての戦争を体験された方のお話を直接聞く時間は、次第に限られたものとなってきています。直接体験のない世代の私たちが、心を開いてお話をよく聞いて、次の世代に伝えること

そして、2020年には東京でオリンピック・パラリンピックが開催されます。昭和39年（1964年）の東京

部が担当したが、今年の司会は、帝国海軍最後の聯合艦隊司令長官小澤治三郎海軍中将の御令孫大穂園井さんが担当された。

今年

オリンピックの馬術競技の会場と

なった馬事公苑が、2回目の馬術競技の会場となります。この馬事公苑は、昭和15年（1940年）に予定しながら開催を返上した「第12回東京オリンピック会場」として造成された場所と聞いています。この幻の東京大会を含めると、80年の間で3回もオリンピック会場となる巡り合わせに不思議なものを感じます。こうして、世田谷の地で年次法要が営まれていくことと無縁ではないと感じます。

本日の年次法要に、ご列席の皆様が末永くお元気で、これまでの貴重な体験談を子供たちの世代にお伝えいただくよう期待しております。

結びに当たり、地球上全ての人々が健康に生きることができるよう、世界の恒久平和をお祈り申し上げます。

平成28年9月22日

世田谷区長 保坂 展人

が、前記のように、時には激しい降雨となつたため、支援員はその合間を縫うようにして準備を進めなければならなかった。しかし、各員の努力により予定時間には準備を完了させることが



御遺族席（簡易レインコートによる雨除け）



受付風景（タイルを飛び石として置いた状況）



直会の献杯・小林和夫予科練雄飛会会長と司会の大穂園井氏



御来賓席・左より杉山会長、藤田理事長、保坂世田谷区長



直会風景

できた。ただ、このような降雨を予想していなかったため、水溜まりやテント内への雨の吹き込み等の障害が発生した。しかし、状況に気付いた支援員は、本坊の軒下にあったタイルを飛び石として水溜まりに置いたり、携帯用レインコートを膝掛けとして配るなどの工夫をして対処していた。

（前事務局員 金子 敬志 記）

◇（編注１）特攻平和観音年次法要は、

昭和27年5月5日、東京都文京区音羽の護国寺において、旧陸海軍関係者を中心に二体の「特攻平和観音像」（海軍は「神風特攻平和観音像」と称していた。）の合同開眼法要が営まれたのを第1回とし、以来64回目の年次法要ということであって、特攻平和観音奉戴以来満64年、特攻平和観音像制作以来65年の歳月が経過したことになる。

本像は、終戦後、静岡市の清水寺住職吉井成純僧正と日光山輪王寺塔頭華嚴院住職関口直大僧正が、大東亜戦争全戦没者の靈魂成仏を發願し、法隆寺に願ひ出て秘仏「夢違観音像」を一尺八寸に縮小した像を制作し、平和観音像として奉戴することの許可を得、昭和25年10月10日に平和観音会を発足させ、会の趣旨に賛同する者にこれを頒布し回向することとしたが、現存が確認されているものは、本特攻観音堂の二体と、鳥濱トメさんによって知覧の特攻平和観音堂に奉安された一体、及び昭和21年から平成18年まで61回にわたり長年執り行われてきた海軍神風特別攻撃隊戦没者の慰霊法要「神風忌」が営まれていた東京都港区芝の増上寺塔頭・安運社に奉安されている一体の計四体である。

陸海軍各一体の特攻平和観音像は、昭和26年5月、先代の太田陸賢僧正に

より開山された世田谷山観音寺境内に、都下仙川に在った元華頂宮邸の持仏堂を移築、「特攻観音堂」とし、昭和31年5月18日に落慶法要を営んで以来毎年法要を行っており、護国寺での開眼法要以来通算して今年、第65回目の年次法要を斎行することとなった次第である。

なお、世田谷山観音寺では、毎月の18日、特攻観音堂において、当慰霊顕彰会員を始め有志による月例法要を営んでいる。そして、大規模な年次法要は、毎年秋分の日(9月23日)又は22日に営んでいるものである。

(編注2) 神仏習合に関しては、平成21年11月発行の当会会報『特攻』第81号(2頁)に掲載したように、平成21年6月11日、高野山眞言宗総本山金剛峯寺金堂において、近畿7府県の有名な151社でつくる「神仏霊場会」(現会長＝北河原公敬・東大寺長老)の主催で「神仏合同国家安泰世界平和祈願会」が盛大に齋行されて以来、定例法要として年に1度、祈願会を催し、寺院と神社で交互に法要を営むことになったとのことであり、同会は、明治維新の際、神仏分離による廃仏毀釈運動の起こる以前は盛んであった、神仏と一緒に崇拜する精神風土を取り戻そうと、平成20年3月に設立され、世界平

和運動の一環として、この運動を進めているとのことであり、この傾向は、今後ますます盛んになるものと思われる。近年、関東においてもその運動は活発に行われており、平成25年には、伊勢神宮の第62回式年遷宮の年に当たり、また、神仏霊場会設立5周年でもあったところから、11月17日、上野の

東京国立博物館・平成館において、同会主催により、「日本人の信仰・神と仏をめぐって」というテーマで、宗教学、神道、仏教の各界代表者による設立5周年記念シンポジウムが行われた。更にまた、昨年は、高野山眞言宗総本山では、開創1200年記念の大法会が盛大に営まれているが、5月19日には、天台宗総本山・比叡山延暦寺の半田孝淳天台座主(97歳)を始めとする天台宗僧侶の一行が訪れ、祝いの言葉を述べる法会を、金剛峯寺金堂で

営んだ。天台宗のトップである天台座主が、高野山眞言宗総本山で法会を営むのは、両宗派の開創以来初めてのことである。平安時代に仏教を発展させた双壁とされる天台宗の開祖・最澄と高野山眞言宗の開祖・空海は、晩年に対立し、久しく交流が途絶えていたが、近年は良好な関係となっており、今回は、高野山眞言宗・総本山金剛峯寺の要望に応じ、半田天台座主一行

の高野山訪問となったものである。法会終了後、高野山眞言宗の添田隆昭宗務総長(68歳)は、「天台宗という良きライバルがあったからこそ、高野山も発展してこられた」と感謝の言葉を述べたとのことである。

なお、付言すれば、世田谷山観音寺の創建者である先代山主太田睦賢和尚は、青年の頃、明治41年に来日して草津に居を構え、癩(ハンセン氏)病療養所で奉仕活動が続けていたアメリカ人宣教師M・H・コンウォール・リー女史の献身的な行為に深い感銘を受けてキリスト教に帰依するようになり、女史の手で洗礼を受け、「ニコラス」というキリスト教名を授けられた。

そして、更に深くキリスト教を学ぼうとして海外留学を思い立ったところ、先々代から強く慰留され、得度することを要請されて、遂に翻意し、得度して睦賢を名乗り、仏教徒としての道を歩むことになった、しかし、得度後もキリスト教関係者との交流は変わりなく続けられたという。更にまた、睦賢和尚は、神官の資格も取り、戦時中は王子稲荷神社の禰宜として奉仕されたということである。そのような宗教に對する考え方、志向を現山主も継承しておられるのではないかと、編者は拝察するのである。

(編注3) 「駒繫神社」は世田谷山観音寺の北東約400メートルの下馬4丁目に鎮座します古社で、昔から付近一帯の鎮守様として尊崇されている。御祭神は大国主命、又の名を子の神、子の明神とも言い、五穀豊穡の神であるとともに、源氏ゆかりの武運の神でもある。その謂れは、現在の社名が示すとおり、古くは源頼義、義家父子が奥州征討に当たって武運を祈願され、その後、頼朝公もまた、藤原氏征討に際して、武運祈願のため参詣され、愛馬芦毛を社前の松に繋いだという故事に由来する(詳しくは、平成19年11月発行の当会会報『特攻』第73号4頁以下参照。なお、樹齡400年以上と言われた境内の「駒繫の松」(三代目)の太木は、すっかり松食い虫に侵食されて枯死したため、一昨年伐採され、現在、四代目の若木を生育中とのことである)。(編注4) 世田谷山観音寺境内の蓮池の中に立ち給う「観世音菩薩立像」は、法隆寺夢殿の「夢違い観音像」を模して拡大鑄造された菩薩像で、その胎内にも、特攻平和観音像の胎内に納められている特攻勇士の霊魂の写しが含まれている。夢違い観音とは、悪い夢(二度と経験したくないこと、思い出したくないことなど)を良い夢に変えて下さる観音様と信仰されている。

靖國神社は日本のアーリントンである

東京大学名誉教授 平川 祐弘



「編注・本稿は、靖國神社社報『やすくに』第734号（平成28年9月1日発行）に掲載されたものであるが、お許しを得て転載させていただいた。」



米国空軍は昭和二十年四月十四日、明治神宮本殿を焼き払った。火災天に沖するのを私は見た。神道と天皇制を敵視して、これこそが日本の超国家主義の背骨であると考え、焼夷弾を浴びせたのである。しかしその敵視が間違いだといつたからこそ、フォード以来、歴代の米国大統領は来日すると明治神宮に参拝するのである。かつて、参拝した際にお祓いを受けたクリントン国務長官は米人記者に聞いただされ

「日本の歴史と文化に敬意を表するため」と答えた。同様に、偏見や誤解が解け、天皇皇后両陛下や首相はもちろんのこと、外国の首脳が靖國神社に参拝する日が必ずや来るであろうと私は信じている。それを妨げるのは靖國神社について政治的解釈をする一部外国勢力とそれに同調する日本人がいるからで、私はそれを遺憾に思っている。両陛下はサイパンやペリリューやフィリピンへ行かれたが、これは靖國神社御参拝を御遠慮され、それに代わって戦死者の慰霊の旅を続けてこられたものと拝察する。

政治と慰霊は別で、それを区別することこそ文明であり、それを同一線上にまぜるのは野蛮である。慰霊はひっそりとしめやかに行うべきで、靖國参拝をマスコミが騒いではいけないのだ。

ここで過去の戦争、米日の戦争犯罪の重さ、戦争犯罪人の扱いの問題を念頭におき、靖國神社についての私見を述べさせていただく。大陸で戦線を拡大し中国ナショナリズムの泥沼にはまりこみ、そこから抜け出すことのできなかった昭和の軍部は国際情勢の判断を間違えていた。「勝者の裁判」斥け東京裁判史観を私は否定する。だからといって戦前の軍部の行動をことごとく

く是認するわけではない。中国も米国も過った日本認識をして行動した。非は相手にもあった。しかし日本側が世界の中の日本をよく認識しなかったからこそ日本は世界を敵にまわす破目に落ちたのである。愚かであった。しかし勝ち戦さであれ負け戦さであれ、戦死者は、刑死者を含めて、その慰霊をきちんと行うことは国民の務めである。

交戦国民が戦争責任者について敵側と見方を異にするのは当然だが、私は日本人として、我が国が先にハワイ真珠湾を攻撃したからと言って、それを口実に降伏意思を外交ルートを通してすでに示しつつあった日本に米国が原爆を投下したことは、戦争犯罪の最たるものと考えている。日本海軍はハワイ空襲で攻撃的を軍関係に絞った。それだから、死んだアメリカ市民は六十八人だった。広島、長崎の一般市民の死者はその数千倍に及ぶ。それを考えるが良い。爆撃の正当・不当は軍人と市民の死者の殺傷比によって示される。東京下町の焼夷弾爆撃も市民の大量殺害だ。米軍墓地には非人道的な爆撃に参加して戦死したアメリカ兵も祀られているだろう。だがたとえそうであろうとも、アーリントン墓地に日本の首相が献花するのは当然だと私は考える。

なぜか。政治と慰霊は次元が違うからである。

死者は区別せずにひとしく祀らねばならない。日本の神道では善人も悪人も神になる。「善神にこひねぎ...」悪神をも和め祭る」と本居宣長は『直弔のたまふ』で説いた。そんな気持ちは日本では庶民の間にしみ込んでいる。「分祀」などという礼を失したことを言い出しとき、無教育のおばあさんが「死んだ人を区別できないじゃありませんか」と言った。神田明神には平将門が祀られている。神道では怨みをのんで死んだ者が崇^たらぬよう神として祀ることもある。それが「悪しき神をもなごめ祭る」なのである。そこがゴッドの敵は地獄に落とすという一神教の自己正義的な立場と違う点だ。キリスト教では、オフエリアの場合でわかるように、神の掟に背いて自殺した者は教会の墓にも埋めてもらえなかった。だから日本は違う。聖徳太子の昔から、生者にかぎらず死者についても「和ヲ以テ貴シトナ」してきた。慰霊は正邪や敵味方の別を超ええるものである。

西洋でも変わり出した。慰霊に際し戦争犯罪人や刑死者を除くべきでないとする考え方が受け入れられはじめた。百年前の第一次世界大戦では戦線

離脱、利敵行為などの軍紀違反で銃殺刑に処せられた兵士は英仏に二千名近くいた。ところが一世紀たつと処刑された者も「苛酷な戦闘におとらぬ苛酷な軍紀の犠牲者」として「国民の歴史的記憶の中に迎え入れるべきである」(ジョスパン)という処置がとられた(『ル・モンド』二〇一三年十一月九日)。

軍法会議の判決で銃殺された兵士を許すことに猛反対したサルコジたち政治家も後には同意した。エリザベス女王も死者たちのために祈られた。

外国人に「靖國神社とは何か」と聞かれると「日本のアーリントンだ」と私は答える。その国立墓地にはアメリカの独立戦争、南北戦争、二度の世界大戦、朝鮮・ベトナム・湾岸戦争などで戦死した軍人や政府要人が埋葬され名が刻まれている。奴隸制廃止のために戦った兵士も奴隸制維持のために戦った将軍も、ともに埋葬されている。後世の政治的妥協の結果だが、慰霊は善悪を超えて行うから慰霊なのである。そもそも人間による善悪の判断などあてにならない。勝者の裁判の判決があてにならない証拠に、大濠公園にはA級戦犯として絞首刑に処せられた廣田弘毅の銅像が建っている。福岡市民の多数はそれを結構なことと思っている。中国や韓国の人は廣田がどんな

政治家か知るまいが、A級戦犯と聞けば憤激してみせるだろう。しかし勝者の裁判に信を置くことが間違いないのである。また慰霊を政治と同一線上に置くことは文明にそぐわない行為なのである。

その点、中国は日本と違う。私も初めは認識違いをした。寧波の南の溪口镇では大きな山がそのまま蒋介石の母の墓となっている。北京で教えていた私がそれを見て来て「あんな墓を拵えるより、周恩来総理のように墓は作らず、灰を撒かせた人の方が立派だね」と言ったら、学生が即座に答えた。「先生は勘違いしています。灰を撒かせたのは墓を造るといつか墓を暴かれるからです」。故周総理を尊敬してやまない学生たちが、そんな醒めた見方を平気口にした。聞けば蔣母墓も一旦は破壊されたが、台湾工作のために復元されたのであった。こんな会話をしてナイーヴな私が笑われたのは、鄧小平が中国を資本主義路線に切り換えた一九九二年のことだが、その時の学生たちの予測通り、鄧小平は死んでも墓は建てさせず、遺灰は空から撒かせた。中国では敵は死んでも許さない。日本と組んで大東亜共栄圏を確立しようとした中国人の一派は漢奸として処刑された。日本の敗戦前に死んだ汪兆銘

の墓は戦後ダイナマイトで爆破された。韓国ではロシアや中国よりはましと日本と協力して国の近代化につとめた政治家の子孫は親日派として今でも吊し上げられ、先祖の墓をあばくことを強要されている。しかし日韓併合に協力した先祖の墓をあばくと、それで許されるどころか今度は不孝者として非難弾劾される。私はそんな不寛容な、言いかえると敵対者に弁明を認めない国でなく、日本に生まれてよかったと思っている。

靖國神社の将来についてはこう考える。日本軍の兵士が多国籍軍の一員として平和維持活動にあたり万一戦死した際は、本人が不同意でないかぎり、やはり靖國に祀りたい。そこには同盟国の首相も参拝に来るだろう。ただしそのためには靖國は日本のアーリントンであるという合意の形成が必要である。宗教の個性性をこえた国民的尊敬のモニュメントとしての合意である。首相の靖國参拝が憲法の政教分離に反するという公明党の主張を聞くと、私は現行の日本国憲法は唯物論に立脚し、無神論を国民に強要するのか、という訝しい気持ちに襲われる。死者を弔うこと自体がすでに広義の宗教行為である。それを憲法は不可というのか。米国も政教分離だが欧州にある米軍墓

地には十字架が並ぶ。その墓に額ずくことが政教分離に反しない以上、他宗教を排除しない靖國の社が戦死者を追悼する場となるのは自然な選択ではなからうか。無宗教の千鳥ヶ淵戦没者墓苑では慰霊にならないと感じられた方は多いに違いない。靖國についてはマッカーサー司令官に求められて意見書を提出したブルーノ・ビッター神父らの「いかなる国家も、祖国のために生命を賭した人びとに対して、尊敬を表わし、感謝を献げること、大切な義務であり、また権利であります」という言葉を銘記すべきであろう。

なお各国の軍事博物館は愛国の物語を展示するのが常だが、だからといって遊就館の解説に主観的な言辞を添えてはならない。歴史は遺物そのものに語らせた。

平成28年度義烈空挺隊 慰霊祭に参列して

評議員 倉形 桃代



渡辺少尉の御遺族



読谷・最初の木碑のあった場所



読谷・木碑前での慰霊祭



読谷・黙祷を捧げる参列者（第一空挺団広報室提供）

今年の沖縄における義烈空挺隊の慰霊祭（主催・全日本空挺同志会沖縄県支部）は、梅雨の最中の6月11日に執り行われた。私達は、前々日に移動して沖縄本島各地にある慰霊碑に参拝しながら戦跡研修をした。当日の朝、読谷飛行場跡にある「義烈空挺隊玉砕之地」の木碑前で執り行われた慰霊祭から、有志として参列させて頂いた。前日の夜から本降りとなった雨は、朝から

降ったり止んだり、時折大きな雨粒がパラパラ落ちてくる。せめて慰霊祭の時には降らないで欲しいと心の中で祈った。読谷に早めに到着したので、航空機掩体壕脇に移設された現在の碑から少し離れた玉砕の地（最初の木碑があった場所）に、お参りに行くことができた。中学校のグラウンドになった玉砕の地一帯は、大分整備が進み、見渡した景色の変化に時の流れを感じた。慰霊祭の開始時刻が近づき、会場の木碑前に参列者が徐々に集まり始めた。桃原浩太郎支部長を始め、直海康寛空挺同志会会長、濱本博文第一空挺団副団長、御遺族代表として、渡辺裕輔少尉（戦

死後二階級特進・大尉）の御遺族・渡邊秀央氏（日本ミヤンマー協会会長・元郵政大臣）とご家族の方々、英霊の後輩である空挺隊員の方々、同志会の方々が参列し、黙祷の後、順次献花を行った。渡辺少尉の御遺族は、毎年義烈空挺隊の慰霊祭が沖縄の現地で執り行われていることを直前に知って、遙々東京から駆け付け、初めて参列された。その後、糸満市の平和祈念公園内・摩文仁の丘へ移動し、「義烈」の碑前での慰霊祭が斎行された。雨の中、祭壇やテント、椅子等会場の設営は全て空挺同志会沖縄支部の方々が実施して下

慰霊祭は11時開式、第15旅団音楽隊4名の喇叭吹奏に合わせて国歌斉唱・黙祷・冲宮神職による修祓の儀・献饌の儀・祝詞奏上の後、桃原支部長による力強い祭文奏上、直海空挺同志会会長・濱本第一空挺団副団長による追悼の辞（児玉恭幸第一空挺団長の追悼の辞代読）があり、濱田種夫沖縄県支部事務局次長が、田中賢一先生から託された追悼の詩「あ、義烈空挺隊」を朗読した。当時、英霊と直に接していなかった田中先生の詩は、健軍飛行場を出撃、散華されるまでの勇猛果敢に戦った戦友の勇姿を彷彿とさせる想いの籠もったものだった。続いて行われた玉串奉奠の際、渡辺少尉の実弟渡邊秀央氏が碑に向かい「絶忠 恋闕至情 是赤心 尊皇大義是臣道 磅礴磚天地 宇内間 唯有神州不滅氣」と、亡き兄上の御遺書の一節を、魂の奥底から絞り上げるように叫ばれたお姿に心打たれた。慰霊祭後に「碑の前に立つたら、急に兄の遺書の言葉が込み上げてきたのです」と仰った。御遺族のお気持ちには、何十年経っても変わらないものだと実感した出来事だった。

また、第一空挺団最先任上級曹長・根本和男准尉が「挺身赴難の精神は未だ健在であります。ご安心下さい！」と力強く英霊に申告されたお言葉も強

く印象に残った。奥山道郎隊長以下、義烈空挺隊の英霊も、さぞ頼もしく思われたことだろう。山城金榮准尉（戦死後二階級特進中尉）の御遺族（実妹前田美恵子さんのご子息）の前田貞夫氏も参列された。今年は約40名の参列者があった。御遺族からの供花が多かったことも印象的だった。

慰霊祭後、お供えの西瓜や果物が切り分けられて振る舞われた。

夜は、那覇市内のホテル山之内で、懇親会が開かれた。その際、御遺族の渡邊氏のご挨拶の中で、12歳上の長兄である渡辺少尉が帰省された時、刀の刃で指を切り、血書を認めていた様子

をご覧になり、「6人兄弟の末っ子である私は、まだ小学校5年生だったので、痛くないのかなと思いついて見ました」と幼心に強く残った思い出を語られた。懇談中、慰霊祭のお世話役をされた濱田事務局次長から、世代交代もあり、御遺族との連絡を取るのが難しくなったというお話を伺った。その際、山城准尉の愛娘である盛山栄子さんから頂いた写真の複写を見せて頂いた。そこには、幼い栄子さんを抱いたお母様が、白い兔を撫でているお姿が写っていた。濱田氏は、「この写真を懐に抱いて出撃されたかもしれない山城准尉の



義烈碑前のお供え



義烈供花



祭文を奏上する桃原支部長（第一空挺団広報室提供）

心情を想うと、たまらない気持ちになるんです。ご兄弟や子供さんの世代は高齢化しましたが、何とか御遺族とのご縁を繋いでいきたい。慰霊祭に参列して頂きたい」と切実な想いを語られた。御遺族の



摩文仁・熊本県の慰霊碑

空挺隊出撃の地、熊本県の健軍駐屯地内慰霊碑前における慰霊祭は、4月14日夜と同16日未明に発生した、最大震度7を観測した熊本大地震と、更に追い討ちをかけるような豪雨による被害からの復旧が進まない中、

お話の中に垣間見えた在りし日の英霊の横顔は、限りなく優しく美しい。「祖国を、愛する家族を守り抜く」という強い意志・使命感が、厳しい訓練をこなし、戦火に一命をなげうつ勇氣と誇りを築き上げる原動力になったのであろう。その精神を真っ直ぐに継承され、日夜厳しい訓練・任務に邁進されている空挺隊員の方々への敬愛の気持ちを新たにしたい。懇親会の締めとなる恒例の「空の神兵」を、全員で肩を組んで斉唱し、懇親会は和気藹々の内に閉会となった。

今年5月に行われる予定だった義烈

とを心から祈念したいと思っている。

北方領土と終戦後の日ソ戦

評議員 飯田 正能

一 はじめに

今年9月2日、シベリアのウラジオストクで行われた安倍晋三総理とロシアのプーチン大統領との首脳会談、更には今年12月15日に予定されるプーチン大統領の訪日によって、北方領土問題解決を含む日露平和条約締結交渉が本格化するのではないかと期待が高まっている。

ソ連の対日参戦と北方領土等占領の経過等について、関連する戦史の権威である中山隆志著『一九四五年夏 最後の日ソ戦』(中央公論新社・中公文庫)の記述を追いながら略記すると後記のとおりである。なお、中山隆志氏は、1934年(昭和9年)、筆者と同じ

韓国・慶尚北道大邱府生まれ、しかも、父上の中山隆礼氏は、大阪陸軍幼年学校20期、陸軍士官学校35期、筆者の大先輩である(筆者は大幼46期、陸士61期)。隆志氏は防大2期、陸自幹部学校教官、幹部学校戦史教官室長、防大教授(専攻は戦略論、近代日本戦争史)を歴任。主な著書に『第二次世界大戦通史』(共著)、『ソ連進攻と日本軍』、『関

東軍』などがある。現偕行社理事・近代史研究委員会委員長を務めておられる。

二 北方領土とは

2月7日は「北方領土の日」である。

北方領土とは、周知のとおり、北海道と千島列島との間に位置する歯舞(はばまい)群島、色丹(しこたん)島、国後(くなしり)島、択捉(えとろふ)島の諸島を言うのであるが、この諸島は元々我が国固有の領土であって、千島列島には含まれないものである。

北方領土は、大東亜戦争終了直後にソ連によって不法占拠されるまでは、一度も外国の領土となつたことがなく、徳川幕府時代には、松前藩の管轄(時として幕府の直轄)下にあり、明治以降は、北海道の一部として統治されてきた。行政区画上は北海道根室支庁に属する。

日本とロシアとは、幕末の安政元年(1854年・旧暦の12月)に、日魯通好条約(日露和親条約、下田条約とも言う)を締結して初めて国交を開いた。この日を新暦に換算すると1855年2月7日となることから、この日が、国際的に北方領土の確定された日とされている。この条約により、日露両国間の国境は、択捉島と

得撫(ウルップ)島との間にあること、及び択捉島以南は日本の領土、得撫島以北はロシアの領土であることを定めた。これによって、歯舞群島、色丹島、国後島及び択捉島は国際法上明確に日本の領土として規定されたのである。

なお、樺太については、同条約は、日露両国民の混在地として国境線を設けなかった。

更に日本とロシアは、明治8(1875)年5月、樺太・千島交換条約を締結した。この条約は、樺太に対する領有権を日本が放棄し、その代償として日本が、千島列島に対する領有権をロシアから譲り受ける旨規定し、その千島列島の定義として、北端の占守(シムシユ)島から南端の得撫(ウルップ)島に至るまでの18島を列挙している。このことは、歯舞群島、色丹島、国後島及び択捉島が日本固有の領土であって、千島列島には含まれないことを明瞭に示しているのである。

なお、樺太については、その後日露戦争の結果、明治38(1905)年9月5日調印のポーツマス条約(日露講和条約)により、北緯50度以南の樺太の、日本への割譲が決まった。

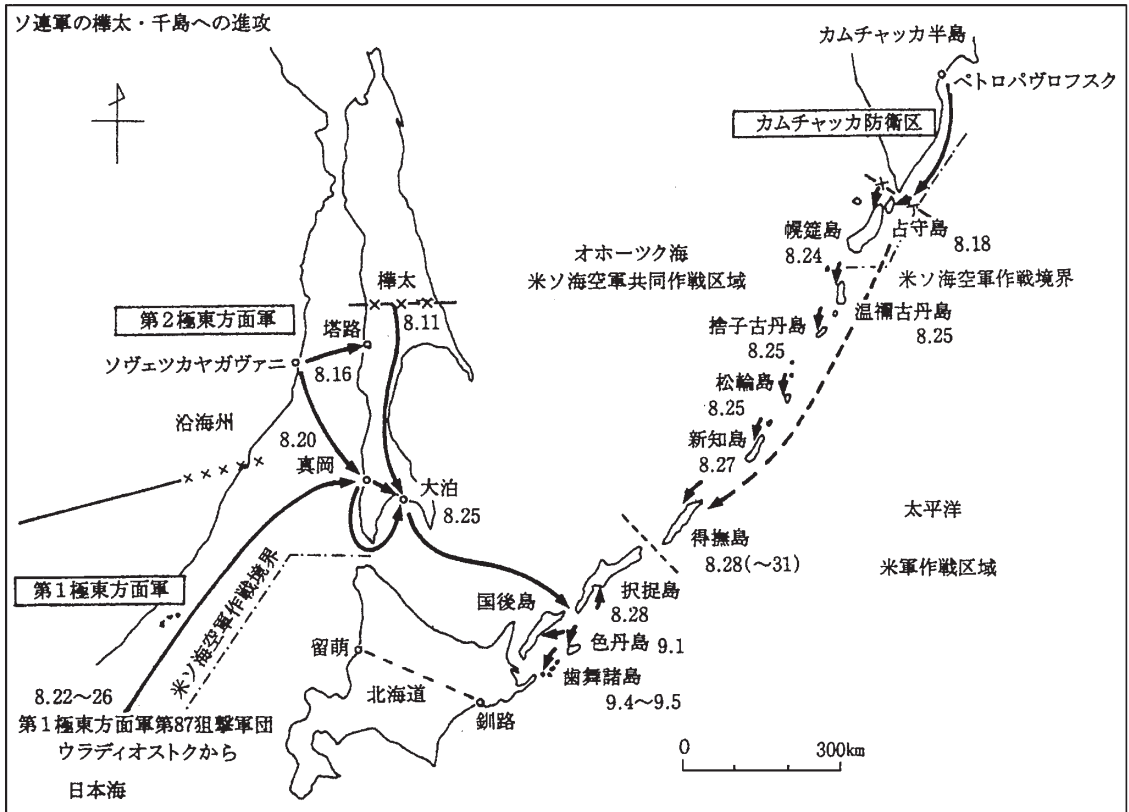
三 ソ連の不法占領

昭和20(1945)年8月8日、ソ

連は米英ソ三国のヤルタ秘密協定を盾に、日ソ不可侵条約を(同条約は、昭和16年4月13日に締結され、5年の有効期間を定めており、昭和21年4月末まで有効であった)を一方的に破棄して対日宣戦を通告し、翌9日未明より機甲師団を主力とする大部隊をもって、満鮮国境を越え、一斉に侵攻を開始した。

樺太の北緯50度線の日ソ国境からの攻撃開始は8月11日、日本がいわゆる留保付きのポツダム宣言受諾通告発電後であった。

当時、樺太及び千島方面における我が軍の防備態勢は十分ではなかった。その上、中央の指導、支援もほとんどない中で、第五方面軍(第88師団及び第91師団基幹。軍司令官樋口季一郎中将)一同中将は、第五方面軍の前身北部軍司令官、次いで北方軍司令官としてアリューシャン作戦を指揮し、昭和18(1943)年7月29日の奇跡的とも言えるキスカ島無血撤退を成功させた。樋口中将も大幼6期、陸士21期、かの石原莞爾中将と陸士同期であり、筆者の大先輩でもある。同中将は、陸軍少将当時、満洲国哈爾濱の特務機関長を務め(それ以前にも、大正7、9年のシベリア出兵に参加した陸軍中尉当時、ハバロフスク特務機関長として



対ソ情報工作活動に従事している）、ソ連軍の内情やスターリンの謀略等にも精通していたものと思われ、後に記述するソ連の対日宣戦布告、樺太・千島への侵攻に際しては、居留民の保護、北海道への引き揚げを優先し、島民の約4分の1、約10万人の緊急疎開を実現した。軍上層部の停戦命令にも柔軟に対応しており、現地軍の自衛のための適切な戦闘を指導した。しかるに、ソ連軍は樺太からの民間人の引き揚げ船に対しても海空からの執拗な攻撃を加え、約1700名の犠牲者を出したことは痛恨の極みである。そのほか樺太における日ソ戦間の島民の犠牲者は、約2000名、軍人の戦死及び行方不明者も約2000名である。また、樋口中将は、昭和12～13年当時、陸軍切っのユダヤ問題の専門家であり、後に大連特務機関長となった安江仙弘（東幼6期、陸士21期）の助言と補佐により、ユダヤ人保護政策を推進し、それらの功績が評価されて、ユダヤ民族のため特に功労のあった、外国人を含む人々を登録し、ユダヤ民族の故国に対する偉業の黄金の記録とされる「ゴールデン・ブック」に、外国軍人としては極めて珍しく、安江大佐と共に樋口中将の名前が登録され、大東亜戦争開始直前の昭和16年11月1日、

登録証書が授与されている。ユダヤ人保護政策等に関しては、別掲の拙文「ユダヤ難民を助けた日本人と八紘一宇の精神」を参照されたい）が、樺太、千島の正面で、それぞれ必死に対応しなければならなかった。

日本のポツダム宣言正式受諾に伴い、8月15日朝マッカーサー元帥は、太平洋の全米軍に対して日本軍に対する戦闘行動停止を命令し、同日正午をもって米軍の攻撃は一切停止した。

同日正午、天皇陛下の終戦に関する「玉音放送」が行われ、大本営の処置は遅れがちではあったが、同日夜「積極進攻作戦中止」を、翌16日午後「即時戦闘行動停止」を命令した。第五方面軍においても、樺太方面への増援等は全て中止され、方面軍司令官は全將兵に対して軽率妄動を慎み、軍紀、風紀を正して各部隊長以下一糸乱れぬ行動に出て、内外に日本武士道の真髄を発揮するようにとの訓示を示達し、自重を要望した。この時点でソ連軍は、樺太においては日本軍の激しい抵抗にあつて、国境線を越えたいばかりのところで阻止されており、千島にはまだ一歩も足を踏み入れていなかった。

ところが、ソ連軍は攻撃を止めるどころか、日本軍がまだ抵抗を続けているとの理由で、攻撃続行を声明し、日

本のポツダム宣言受諾が確認された8月15日、極東軍司令官ワシレフスキー元帥は、第二極東方面軍及び太平洋艦隊に対して樺太西岸の真岡への上陸及び千島列島北部占領を命令した。

16日朝、樺太西岸の塔路にソ連軍が上陸し、新たな戦闘が始まった。同日午後第五方面軍は第88師団に対して自衛戦闘を行い、南樺太を死守せよと命令した。一旦停戦に向かいかけた第88師団は、急遽各部隊に再武装の上、陣地を占領するよう命令した。各部隊は各正面において果敢に戦い、陣地を死守する一方、在留邦人の北海道方面への引揚げ輸送に全力を尽くした。

国境付近の戦闘を通じてソ連軍に与えた損害は、戦死約1000名、戦車数十両破壊と推定されたが、ソ連側の明確な資料は今なお不明である。日本側の戦死者は、歩兵第一二五聯隊が340名、輜重兵大隊144名、その他の配属部隊を含め568名となっている。

ソ連軍は20日には更に大部隊を真岡に上陸させ強襲攻撃をかけてきた。しかし、当時、真岡の市街や港湾を守る部隊はなく、トーチカや防御施設もなかった。ソ連軍によって攻撃され、死傷し、捕虜にされたのは、ほとんどすべて一般住民である。不幸なことに、

警防団や国民服を着ていた人達が、軍隊と区別できず、特に狙われたようである。ソ連軍は、自ら作り出した幻影と激戦を交え、一般市民を虐殺した。

ソ連側の戦史によれば、「真岡港や市街の戦闘は激戦であった。砲兵や機関銃の支援を受ける兵力約二個大隊の日本軍は、頑強な抵抗を示した。自動銃中隊は、港湾防衛に任ずる日本軍の一隊を攻撃して、日本兵80名を捕虜にした。上陸軍の進路を阻む敵の機関銃火点等を撲滅する確な艦砲の一斉射撃は、上陸部隊将兵の士気を高揚させた。14時、上陸軍は真岡市街及び港湾を占領した。日本軍は、将兵の戦死三百名以上、捕虜約六百名の損害を残して、鉄道や舗装道路沿いに樺太内部に後退し始めた。」などと記している。ソ連側の戦史が如何に描こうとも、ソ連軍が攻撃したのは、一般民間人であり、例えば、当時の高橋町長は、助役や第一国民学校教頭らと校庭で御真影を奉焼していたところ、突如ソ連軍の艦砲射撃が始まった。町長は人々を避難させ、学校内の飯町長室にいたところを、ソ連兵が侵入してきて捕らえられ、北浜町の岸壁に連行され、他の人達と一緒に一列に並べて自動小銃を乱射された。重傷を負ったが、一命を取り止め、漁船の陰に隠れて3日を過ご

した後、助けられて病院に運ばれた。

真岡中学校の教練教官江村孝三郎少尉は、今はこれまでと思い定め、夫人と子供3人及び居合わせた隣家の夫人と子供を諭し、一同仏間に集まって壮絶な自決をした。真岡神社の神官湖山寛氏も白装束に身を固めて自決した。

中でも悲壮だったのは、通信維持のため、電話交換という職務の重要性を自覚し、引揚げの指示を断って郵便局（電話交換室）に残留した9名の乙女たちの最後である。ソ連軍の乱射乱撃の修羅場の中で、彼女らは最後まで泰然として職場を守り、ソ連兵が踏み込む直前、全員静かに毒薬を仰いで自決した。「皆さん、さようなら、さようなら、これが最後です」の言葉とともに、その短い生涯を閉じた乙女たちの死を忘れることはできない。今乙女たちは靖國神社に英霊として祀られ、その遺影や遺書は遊就館に展示され、と

わに顕彰されている。

一方北千島においても、18日占守島に対し、対岸カムチャツカ半島ロバトカ岬からの砲撃、艦艇の援護射撃の下、強襲上陸をかけてきた。我が海岸配備部隊（第91師団、独立歩兵第二八二大隊）は、これに応戦して激烈な砲火を浴びせ、この日撃沈、擱座させた艦艇は、確認しただけでも13隻以上に達し、

水没したソ連軍将兵は3000名以上、戦死傷者も同数を下らないものと推定される。

これより先、昭和20（1945）年2月11日のヤルタにおける米英ソ三国秘密協定（いわゆるヤルタ協定）においては、ソ連の対日参戦の見返りとして、樺太の南部及びこれに隣接する一切の島嶼はソ連に返還、千島列島（どの範囲を意味するか、必ずしも明確ではない）はソ連に引き渡されることになっていた。

同年7月26日、ポツダム宣言が発表されたが、同時にポツダムにおいて米英ソ三国軍事会議が開かれ、ソ連の対日参戦に当たっての米ソ海軍及び航空部隊の作戦区域の協議が行われた。その結果、ベーリング海とオホーツク海を米ソ海空軍共同作戦区域とし、千島では音瀬古丹海峡を米ソ海空軍作戦境界とすることで合意した。

同年8月15日、トルーマン大統領はスターリン首相に対して、降伏の細目に関し、日本に与える一般命令第一号を決定した旨とその内容を通知した。その眼目は、日本軍の降伏を受け入れる各国担任地域の割当てであり、実質的な占領地域を意味していた。ソ連の担任地域には、満洲、北緯38度以北の朝鮮及び南樺太は含まれていたが、千

島列島には触れられていなかった。しかし、実際には、先の三国軍事会議での合意のとおり、米国統合参謀長会議では、温棚古丹海峡を境界にしてそれ以北をソ連軍、以南を米軍による分割

占領が考えられていた。スターリンは直ちに16日、トルーマンに書簡を送りソ連軍に対して日本軍が降伏すべき地域に、ヤルタ協定に基づき千島列島全部を含めること、更に釧路市と留萌市を結ぶ北海道北半分を同地域に含めるよう新たな要求を加えた。スターリンが18日に受け取った書簡(文書日付は17日)でトルーマンは、千島列島をソ連軍地域に含めることは同意したが、北海道北部の占領を拒否し、更に中千島の一つに米軍航空基地を設ける権利を要求した。スターリンはすぐには決断できなかったのか、トルーマンへの返事も必要な指令も暫く出さず、樺太、千島の作戦と、北海道北部占領作戦の準備が並行して行われることになる。ソ連は米軍の進出がないことを幸いに、日本固有の領土である南千島及び北海道に付属する歯舞群島、色丹島まで占領した。しかも、歯舞群島の占領は日本の正式降伏調印(9月2日)後に行われたものである。スターリンは8月22日まで、樺太、千島の作戦と北海道北部占領の作戦準備を続けた後

四 北方領土返還交渉

ようやく断念した。本土分割の悲劇は危ういところで回避されたのである。

以来71年、その間、日ソ・日露間には、北方領土を巡る交渉が幾度か行われた。昭和26(1951)年のサンフランシスコ平和条約で、日本は南樺太と千島列島(択捉島より北の島々)の領有権を放棄したが、ソ連は同平和条約の締結には応じなかったものの、日本が放棄したのは、北方四島を含む千島列島全体であると主張している。昭和31(1956)年10月、日ソ両政府は、平和条約締結後に歯舞群島、色丹島を日本に引き渡すとする共同宣言に署名し、国交が回復した。平成3(1991)年、ソ連のゴルバチョフ大統領が来日し、日ソ共同声明に署名し、初めて公式文書で領土問題に触れた。その後、ソ連は崩壊し、ロシア連邦が成立、翌年から北方四島へのビザなし渡航が始まった。平成5(1993)年10月、ロシアのエリツィン大統領が来日し、細川首相と日露首脳会談の結果、4島の帰属問題を「法と正義の原則を基礎として解決する」とする東京宣言が締結され、日ソ間の領土問題等の懸案はロシアが引き継ぐことが表明された。その後平成9

(1997)年11月、橋本首相とエリツィン大統領がクラスノヤルスクで会谈し、平成12(2000)年までに平和条約を締結するよう全力を尽くすこととで合意し、翌平成13(1998)年4月、橋本首相がエリツィン大統領と静岡県伊東市川奈で会谈し、「4島の北側に国境線を引き、施政は当面ロシアに委ねる」とする「川奈提案」を示した。平成16(2001)年3月、森首相とプーチン大統領がイルクーツクで会谈し、「4島の帰属問題を解決して平和条約を締結する」とする声明に署名したが、歯舞・色丹の返還と、国後・択捉の帰属を分離して協議する「並行協議」方式の提案や歯舞・色丹の「2島先行返還論」、4島の面積を折半する「面積等分論」など、様々な「2島プラスアルファ」が取りざたされた。

その後、平成22(2010)年及び24(2012)年には、ロシアのメドヴェージェフ大統領が、北方領土に上陸し、北方領土は1島たりとも渡さない、と宣言した。

平成25(2013)年4月、安倍首相はモスクワでプーチン大統領と会谈し、「双方に受け入れ可能な解決策」への交渉を加速することで合意し、更に平成28(2016)年5月、安倍首相はプーチン大統領とソチで会谈し、「新しいアプローチ」で交渉することとで合意した。そして冒頭に記載したように、再び9月2日のウラジオストクでの日露首脳会談で、ロシアとの経済協力に積極的に取り組む姿勢を前面に打ち出すとともに、平和条約交渉について踏み込んだ議論を行った。その結果、12月のプーチン大統領の来日が決まり、15日に安倍首相の地元・山口県長門市で日露首脳会談が行われることになった。

五 今後の日露交渉の課題

平成24(2012)年末の第2次安倍内閣発足後、首相の訪露は既に5回を数える。外交儀礼上、首脳の往来は相互訪問が基本であるが、プーチン大統領の来日がウクライナ情勢のありで実現しない中でも、首相はあえて繰り返し訪露し、対話を重ねてきた。その一つが2年前のソチ冬季五輪開会式への出席とプーチン大統領との会談である。ソチ冬季五輪の開会式は、平成26(2014)年2月7日であった。

ところで、たまたまこの日は、北方領土の日と重なった。そのため新聞報道等によると、当初安倍総理は、この日避けてソチ五輪開会中にロシアを訪問し、プーチン露大統領とも会談する予定とのことであったが、安倍総理

は2月7日、東京都千代田区内で行われた、北方領土返還要求全国大会に出席し、「北方領土返還交渉は勿論のこと、日露関係の強化は、両国の利益に合致するのみならず、地域の安定にとっても重要である。ロシア大統領との信頼関係を深めつつ、今後の日露平和条約締結交渉の前進を図っていきたい。主張すべき点は正々堂々と主張する」旨の決意を述べ、その日直ちに政府専用機でロシアへ飛び立ち、その夜行われたソチ五輪開会式に出席し、翌8日には選手村の日本選手を激励した後、プーチン大統領との首脳会談を行い、北方領土問題を含む日露平和条約の締結、経済協力問題等の解決に向けて、政府間交渉を加速することの同意を得た上、秋のプーチン大統領の訪日の約束を取り付けた。安倍総理の精力的、かつ、正々堂々たる外交交渉の態度を賞賛したい。

ところで、ソチ五輪開会式には、中国の習近平国家主席も出席したが、その前日に行われたプーチン大統領との露中首脳会談では、平成27(2015)年の対日戦勝利70周年記念行事を共同で行うことを協約したと伝えられた。

このように、露中関係は、ペレストロイカ以後もなお、表面的には強固なように見える。しかし、両国間には国

境問題を始め、経済、民族問題等種々の問題が介在しているようである。

一方、最近のロシアの経済状況、国民世論の動向等を見ても日露の関係はそう悪くない。むしろ、対中国関係については、日露提携の好機ではないかと思われる。中国の脅威から日本を守る、その鍵を握るのはロシアと領土問題ではないかと考えられる。

地政学的に見て、今後日露が接近して北方領土問題が解決する可能性は充分あると見ていいのではないか。

ところで、北方四島の返還(日本の立場は、そもそも北方四島は、我が国固有の領土であるところ、終戦直後、旧ソ連によって略取された領土であるからこれを返還せよ、と要求しているのに対して、ロシア側は、対日戦勝利の結果、合法的に取得した領土であった、これを双方の協議により引き渡すものである、と主張している)問題に関して、今後、日露の関係が良好な状態になる可能性があるかどうかであるが、見方によっては、今その方向に動きつつあるとも言えよう。その一つは、中国の脅威である。尖閣諸島に対する執拗なまでの領海・領空侵犯、海軍を始めとする軍備増強、極度の反日情報戦等々であるが、ロシアにとって中国の軍備増強は、極東地域に対す

る大きな脅威となりつつある。

以下、作家で元外務官僚の佐藤優氏(1960年生まれ。同志社大学神学部卒。1985年外務省入省。在英・在ロシア連邦日本大使館等勤務を経て、外務省国際情報局分析第一課主任(分析官)の見解によると、日本が中国の脅威的な経済的、軍事的攻勢に対するカードで使えるのはロシアしかない。アメリカは米国債を一番保有している中国と喧嘩はしないだろう。そうすると、中国の横暴から日本を守る鍵はおのずとロシアになる。今後の日露関係について例えば、国後島の水産加工工場を100パーセント日本の出資で建設し、運営も行うが、現地人を積極的に雇用する。現在は、イルクーツクの業者が北方領土の公共事業の一部として中国人に5万円の仕事をやらせているが、島民の大半は潤っていない。また、ロシアではシベリア鉄道の近代化計画が持ち上がっているが、トンネル工事が難題となっている。トンネル工事は日本の得意分野であるから、技術協力で関係を強化できる。中国に頼むと大量の労働者が工事終了後も住み着いて事実上、移民がセットになってしまう。これはロシアにとって脅威である。1991年時点で810万人いたバイカル湖以東のロシア人は今

640万人しかいない。これに対し、中国の東北方3州の人口は1億3千万人もある。気を許せばあつという間に雪崩れ込んできて、「ハバロフスクは中国領だ」と言い出しかねない。もう一つ、福島第一原発の使用済み核燃料も含めて、放射性廃棄物をどうするか。日本は大きな問題であるが、ロシアでは自国の原子炉や核ミサイルなどの放射性廃棄物を処理するためにガラス固化して地下深くに保存する技術開発を行っているが、そこで日本のものもついでに処理すると申し出たら、日本のロシアに対する国内世論は大きく上がる。アメリカもフランスもやらないものをロシアがやるのだから日本とロシアが放射性物質の処理分野で協力して、日本も技術供与をして一緒に地下深く埋めてしまう、そういうことができるくらい両国の信頼レベルを上げていかなければいけない。

だから、もう「領土か経済か」という二者択一の議論は止めるべきで、これからは領土も経済も、経済が進めば領土問題も進んで、領土のバリアがなければ経済も出ていきやすくなる。そのパイラルに入れることが政治の仕事、そのための枠を作るのは外交官の仕事、それを政治家がやれと言えれば作れるから、詳細を考えて、こういうこ

とができますと、それがプロの提案である、と言っている。なかなか示唆に富んだ意見である。

ユダヤ難民を助けた日本人と八紘一字の精神

評議員 飯田正能

平成20年12月1日発行の靖國神社の社報『靖國』第641号に歴史教科書研究家上杉千年氏の「ユダヤ難民を助けた日本人」と題する論稿が掲載された。同氏は昭和2年岐阜県生まれ、國學院大學文学部史学科卒業後、高校の社会科教師として岐阜県と静岡県で定年退職まで教鞭を執られ、その間歴史教科書問題の最前線に立ち、多くの論文と著作を発表して、日本人の教育再生を主唱し、今なお靖國問題等に取り組んで活発に啓発運動を続けておられる愛国の士である。最近の代表作に『猶太難民と八紘一字』（平成14年・全貌社）、『ユダヤ難民を助けた日本人と日本人―八紘一字の精神日本を救う』等がある。

その具体例として、「昭和13年1月21日関東軍『現下ニ於ケル対猶太民族施策要領』策定」、「昭和13年12月6日五相會議『猶太人対策要綱』を陸軍大臣板垣征四郎の提案で策定」等を例示されている。

昭和12年当時、日を追って激烈となるナチス・ドイツ及び中欧諸国における反ユダヤ運動並びにソ連における反シオニスト運動に対抗して、世界各地に在住するユダヤ人が、その生存権確保のため、全世界的な共同機関を結成しようとの動きが活発となり、当時、ユダヤ人にとってパラダイスと言われた満洲国の居留ユダヤ人（約5500人）の間でも極東ユダヤ人大会を開催したいとの意向が固まり、その代表者からハルビン（ハルビン）のハルビンからハルビン特務機関に対し、「我々は日本が極東に於て占むる地位を認識し、日本に依存の決意を固め、今後は日滿両国の国策に順応して生存の途を求めんとするに付、我々の結成に対し日滿両国官憲側の内部的了解を得度き」旨の申出があった。これに対し、当時のハルビン特務機関（機関長樋口季一郎少将―陸士21期・大幼6期、終戦時の第5方面軍司令官・中将）も関東軍司令部（参謀長東條英機中将）も好意的であり、同司令部を通じて陸軍中央に伝えられ、陸軍中央は、当時陸軍

随一のユダヤ研究家であった安江仙弘（のりひろ）大佐（陸士21期・大幼6期、戦後ソ連に拘束され、昭和25年夏ハバロフスク収容所第21分所にて死去）を大連特務機関長として送り込み、極東ユダヤ人問題の対策責任者とした。安江大佐を始め担当者の努力により、第1回極東ユダヤ人大会が、昭和12年12月26日から3日間開催され、樋口少将、安江大佐、河村愛三憲兵少佐らが個人の資格で出席した。樋口少将の大会祝辞は「場内ニ多大ノ感激ヲ与ヘ出席全猶太人ノ感謝感激ハ会場破レン許リノ拍手ヲ以テ迎ヘラレ流涕スルモノアリ」と記録されており、この大会は第2回（昭和13年12月）第3回（昭和14年12月）へと続行された。

前記の「昭和13年1月21日の関東軍『現下ニ於ケル対猶太民族施策要領』はこのような背景の下に、安江大佐の進言に基づき、「五族協和」にユダヤ人を加えた「六族協和」の構想を実現しようとしたものであり、「在極東猶太民族ノ日滿依存傾向を利導シテ之ヲ世界ニ散在スル彼等同族ニ及ホシ以テ彼等ニシテ功利的術数ヲ抛チ真ニ正義公道ヲ基トシテ日滿両国ニ依存スルニ於テハ之ヲ八紘一字ノ我大精神ニ抱擁統合スルヲ理想トス」ただし、「特ニ現下満洲国開発ニ際シ外資導入ニ専念

スルノ余リ猶太資本ヲ迎合的ニ投下セシムル如キ態度ハ厳ニ之ヲ抑制ス」とある。

次いで、昭和13年3月8日、ソ満国境に近いソ連領オトポール駅に多数のユダヤ難民滞留の報に接するや、樋口少将は満洲国外務局に難民救出を依頼するとともに当時の松岡洋右満鉄総裁に電話で列車の手配を依頼した。松岡総裁は直ちに、多数の列車の手配とユダヤ難民の無賃輸送を指示した。このような英断に基づく処置によって多数（約2万人と言われる）のユダヤ難民が救出された。

「命のビザで六千人のユダヤ人の命を救った日本人―杉浦千畝」として、我が国の多くの中学歴史教科書にも取り上げられている、リトアニアの日本領事代理杉浦千畝が、当時ドイツと同盟関係にあった日本政府の意向に反し、人道と博愛の精神から日本人国のビザを発行して、約6千人のユダヤ人の命を救ったという、昭和15（1940）年夏の事件より2年半も前のことである。

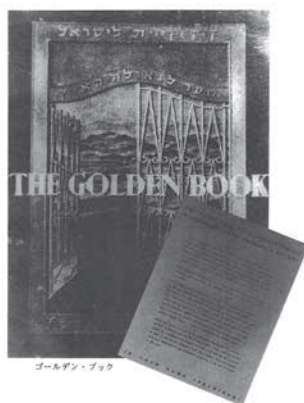
更に安江大佐は、当時諸外国がユダヤ問題に冷淡で、ユダヤ難民の救済にも消極的であり、我が外務省も昭和13年10月3日「猶太避難民ノ入国ニ関スル件」として訓令を発し、ユダヤ難民

の流入を原則的に禁止するとした中、また、執拗なナチス・ドイツの強圧の中にも拘わらず、当時の陸軍大臣板垣征四郎中将に意見具申をしてユダヤ難民保護を訴えた。板垣陸相もまた、本来は外務大臣の所管事項であるユダヤ難民問題について「五相会議」という政府の重要政策を審議する会議に提案し、昭和13年12月6日に前記の「猶太人対策要綱」を策定させ、ここにユダヤ難民保護は「国策」となった。その要点は「現在日、満、支二居住スル猶太人ニ對シテハ他国人ト同様公正ニ取扱ヒ之ヲ排斥スルカ如キ處置ニ出ツルコトナシ」「新二日、満、支ニ渡来スル猶太人ニ對シテハ一般ニ外國人入國取締規則ノ範圍内ニ於テ公正ニ處置ス」というもので、その前文には「獨国ト同様極端ニ排斥スルカ如キ態度ニ出ツルハ啻ニ帝國ノ多年主張シ来レル人種平等ノ精神ニ合致セサル」が故であるとしている。

このような史実は、当時の日本人が、軍人を始めとして如何に「八紘一字」の建国の精神を堅持し、人種平等の理念を包有していたかの証左であろう。

因みに安江大佐（昭和15年9月28日大連特務機関長解任、予備役編入。その前日に日独伊三国同盟締結）に対し、昭和16年11月1日、ハルピンのホテル・

モデルンで数百名のユダヤ人列席の下に、世界ユダヤ人会議代表のM・ウスイシキン博士署名の、ゴールデン・ブックへの登録証書授与式が行われた。ゴールデン・ブックは、ユダヤ民族に功労のあつた外国人を含む人々の偉業の記録である、とされている。なお、樋口中将も同時に登録された。



平成28年度 第61回高野山慰霊祭に参列 して

理事（事務局長） 石井 光政

平成28年9月4日（日）、世界遺産で有名な和歌山県高野山において、陸上自衛隊第一空挺団OB会（全日本空挺同志会）主催の空挺隊員慰霊祭が執り行われ、当顕彰会を代表して参列しましたので、次のとおり報告します。

1 慰霊祭の概要

本慰霊祭は、先の大戦中に亡くなられた空挺隊員を偲んで慰霊するため、60年前の昭和31年に旧軍関係者が高野山に「空」の墓碑を建立し、以来毎年慰霊祭を執り行ってきたところ、陸上自衛隊の空挺部隊である第1空挺団OB会の全日本空挺同志会がその意志を受け継ぎ、第1空挺団の殉職者、及び同OB会会員で亡くなられた方も合祀して慰霊祭を執り行っているものである。

慰霊祭は例年9月の第1日曜日に執り行われるが、新合祀者の御遺族も参加されて、宿坊における前夜祭（懇親会）からそのプログラムが開始された。

今年、OB会員等で合祀される方は16柱と、例年に比して多く、そのため御遺族も多くの方が参列され、全員で

170名程となり、空挺同志会の菩提寺不動院の宿坊だけでは間に合わず、他の2箇所の宿坊に分宿した。

当日は6時から不動院本堂で朝の勸行が行われたが、新合祀者の御遺族を始め、ほとんどの参列者が参集し、本堂の外まで溢れていた。勸行では合祀される方たちのお名前が順次読み上げられ、その他、先の大戦で亡くなられた空挺隊員、第1空挺団の殉職隊員、昨年までに合祀された空挺同志会OBの御霊に対しても慰霊が行われた。

9時15分、不動院から陸自第3師団の音楽隊を先頭に、警察の先導で奥之院入口の「一の橋」を渡ったところにある「空」の墓碑まで行進し、全員が



宿坊から「空」の墓碑までの行進



祭壇と「空」の墓碑、パラシュート

席に着いたところで式が開始された。国旗掲揚、国歌斉唱に引き続き、音楽隊の「海ゆかば」の演奏を聴きながら黙祷。不動院からの御導師以下6名の僧侶が入場された後、新合祀者の紹介、御遺骨安置(納骨のため、分骨して御遺族が持参された御遺骨を空の墓碑前に安置)、御導師以下僧侶による読経、全日本空挺同志会会長(直海康寛会長)の祭文奏上、第1空挺団長(兒玉恭幸陸将補)による追悼の辞が述べられ、その後納骨。再度読経が行われ、この間、参列者が順次焼香を行った。読経と焼香が終わった後、御導師らが退場され、引き続き追悼電報の紹介、御遺族代表の挨拶、「空の神兵」を音

楽隊の演奏に合わせ全員で斉唱し、国旗降下、閉祭となった。

2 所見

今回の慰霊祭では、「空挺」という落下傘で繋がれた旧軍と陸上自衛隊の絆の強さを感じた慰霊祭であった。私は空自で奉職したが、陸自旧軍との関係を極力避けてきたように感じていたので、極めて新鮮であった。

我が顕彰会のことを考える時、特攻隊で散華されたほとんどの方は結婚されたおらず、したがって直系の子孫が存在しない。今は御遺族では、甥御さんや姪御さんらが、その他の会員では旧軍の方や一般の賛同して下さる方が慰霊をして下さっているが、旧軍の方々は毎年多くの方がお亡くなりになり、また、御遺族の方は代替わりにより、今後御子孫が慰霊を続けて下さるかは不明である。

先の大戦で国のために亡くなられた英霊を慰霊し顕彰するのは、基本的に国の責任と思うが、それがなされるまでの間は、同じ国家防衛に任じている自衛隊員やそのOBがもっと主体的かつ積極的に参加するのが望ましいと考ええるものである。

これを御覧の顕彰会会員には引き続き特攻隊の慰霊顕彰を続けていただくとともに、多くの新会員を勧誘してい

ただき、特攻隊の英霊に感謝の念を末永く続ける態勢を築いていただきたいと念ずるものである。



参列の御遺族と「空」の墓碑



標識

「忘れないで」という想い
—シアターDAC第50回公演
『失われた過去を求めて
ああ！陸軍飛行学校桶川分
教場(特攻隊)』を観て—

理事 笹 幸恵

去る8月6日、埼玉県桶川市の市民ホールで上演された『失われた過去を求めて ああ！陸軍飛行学校桶川分教場(特攻隊)』を観に出掛けました。

開演15分前、既にほぼ満席。地元の年配の方が多いように見受けられましたが、親子連れもちらほらいました。

舞台は平成28年、つまり「現在」の、ある家族の姿から描かれます。そこで詳らかにされる70年前の惨劇。東京大空襲によって火の海になった町を逃げ惑う人々。満洲から命からがら引き揚げてきた人々。筆舌に尽くせぬ苦勞がそこで披露されます。そして時代はさかのぼって70年前。

桶川分教場の指導教官の家を中心に人間模様が描かれます。あどけない特攻隊員たち。そこでの出会いや切ない思い。因みに指導教官のモデルとなっているのは、当顕彰会理事である白田智子さんのお父上、伍井芳夫陸軍大尉(戦死後二階級特進、中佐)です。第

23振武隊長として昭和20年4月1日、沖縄・慶良間列島方面に出撃されました。温厚なお人柄で多くの人から慕われ、お芝居の中でもそれを思わせるエピソードがあります。そしていよいよ、隊員たちは分教場から知覧の特攻基地へと飛び立っていきます。彼らを見送る市井の人々。日の丸の旗を振って、振って、振り続けて・・・。

「忘れないで。私たちのことを」

舞台からその歌声が響きました。

シアターDACというのは、桶川市民ホールを拠点に活動している劇団だそうです。解説のような言い回しが多いのは、より多くの人に正しくこの戦争を知ってもらおうという意図があるのでしょう。観終わってみて、個人的に何より好感を持ったのは、お芝居を通して伝わってくる、「私たちの地元にある桶川分教場のことを、もっと知ろうよ」というメッセージです。

桶川分教場は、熊谷陸軍飛行学校の分教場として、昭和12年6月に開校しています。昭和20年2月に閉校されるまでの間に、少年飛行兵や学徒出陣の特別操縦見習士官、あるいは他の兵科から飛行兵に志願した召集下士官など、推定で1500名ほどの飛行兵を養成していました。閉校された後は特攻隊の訓練基地となり、第79振武特別

攻撃隊12名が知覧に向けて出発しています。陸軍初の練習機による特攻隊でした。お芝居は、彼ら特攻隊員と、彼らを見送る町の人々との物語です。

戦後、分教場の兵舎は、大陸からの引揚者の住居として使用されました。そしていつの間にか、町の人々はそこを「分教場の兵舎跡」ではなく、「引揚者の住まい」として認識するようになってしまいました。建物が残っていても、桶川分教場の存在は忘れ去られようとしていたのです。

そこで立ち上がったのが、NPO法人「旧陸軍桶川飛行学校を語り継ぐ会」でした。臼田智子さんも発起人の一人です。桶川分教場は、あちこちの飛行場や飛行学校が消えていくなか、比較的良好な状態で残されている稀有な場所です。映画のロケ地にもなったことから、多くのメディアに取り上げられるようになりました。

また、桶川市役所に勤めるある方は、知覧の特攻平和会館を訪れて初めて桶川分教場の存在を知ったと言います。特攻隊の編成地に「桶川」の文字があったのです。その場所は、引揚者の住まいだと思っていたあの荒川沿いの建物でした。「まさか自分の地元に、こうした歴史的な遺構があるとは思いませんでした」と。

現在の桶川分教場は、解体調査・保存のための工事で、平成29年3月まで



桶川市民ホールにて臼田智子理事（右）と共に



公演終了後の混雑振り

立ち入ることができません。しかし、市の有形文化財に指定されていること



桶川分教場旧兵舎



桶川飛行場（現ホンダ飛行場）



CD「レクイエム・知覧の花」



世田谷山観音寺本坊 (旧小田原代官屋敷)



勉強会会場

年度事業計画には、全体委員会事業があります。当顕彰会の事業は、全体委員会が計画・実行するよう、進められています。そのため全体委員会を構成する各人が知識・経験を基に企画・運営能力を高めておかなければならぬわけです。内容

「レクイエム・知覧の花」の紹介—全体委員会・勉強会の一コマ—

理事 水町 博勝

もあって、復元されれば正に「生きた歴史」になるでしょう。そして市が中心となって、桶川分教場の存在と、そこから飛び立っていった人々、見送った人々の存在を「忘れないで」と言い続けます。若し世代、取り分け、地元の中高校生が授業の一環としてこのお芝居を観てくれたら、と願って止みません。

は、講演会・勉強会・研修会の三分に区分されています。

特攻隊員等の講演会、特攻戦史・特攻隊員の遺書・日記等から心情を思い慮る勉強会、特攻隊の練成基地・出撃基地及び資料参考館等現地の研究会、特攻隊に関する委員会各人の資質の向上を図っているところです。

講演会・研修会は委員会の担当者が計画し、委員のみならず会員にも機会があればご案内しているところです。

勉強会に関しては、海軍関連は、海自OBの小倉利之理事が、陸軍関係は、空自OBの水町がそれぞれ分担して、一昨年は、特攻の戦史を、昨年と今年は、遺書等から特攻隊員の心情を知り、慰霊顕彰の資としてきました。遺書等の勉強会の場合は、世田谷山観音寺の本坊(旧小田原代官屋敷を移築したもの)の座敷をお借りして、参加者は資料を基に、意見交換を行っています。終了後は引き続き特攻観音の月例法要(毎月18日14時)に参列します。特攻観音堂内において、陸海軍の特攻戦死者の霊名を謹記した巻物(霊璽簿)を胎内に納めた陸海二体の特攻平和観音像を拝み、特攻観音経を誦読します。

再び本坊に戻り、直会を執り行いますが、直会では、広く参加者との歓談という月例参拝に合わせて、慰霊・顕彰の場に相応しい勉強会になっています。7月18日は私の担当で、美しい日本の歌の会が制作した「エクエム(鎮魂歌・知覧の花)」というCDを資料に、これを聞く会としました。このCDは、一般の音楽愛好家向けに戦後60年の節目の年に制作されました。祖国を愛し、これを護らんがために沖縄の戦場に散って逝った若者たちが、どのような思いを抱いて飛び立って行ったのか。特攻基地・知覧を舞台に、死を前にした若者が描いた作品です。

私は昨年、この会

の音楽会において、戦後70年の折でもあつてか、偶然このCDが目止まりで、入手しました。

聞いてみると、戦局に応じ、特攻隊員とその家族が死に直面して行く姿を、詞と曲、そしてナレーションで綴られ、それを声楽家が感情豊かに歌われ、バックの演奏の効果もあり、特攻隊員の鎮魂歌に相応しい芸術作品であります。書物・演劇・映画・オペラなど特攻隊をテーマにした作品が多くありますが、その一つとして今回の勉強会において委員会のメンバーに紹介しました。

委員会のメンバーではありませんが、会員の清水悟氏(清水総合金物(株)社長・ネービー21理事長)も参加されて、今日は良いものを聴いて勉強になりました、と感想を述べられました。海軍の精神・歴史・伝統・文化を語り継いでおられる清水氏のコメントには、沖縄戦の特攻は、陸軍も海軍も共通の敵艦を目標に戦い、隊員はここ世田谷山観音寺に共に祀られている。この場で聴くCDは、また格別であったのではないかと思います、とありました。なお、このCD「レクイエム・知覧の花」については、当顕彰会の事務局にライブラリーとして登録して、貸出ができるようにしたいと思っていますので、活用していただきたいと思っています。

〈講演録〉

特攻で散華された先輩、
戦友の志 (前編)

海兵73期 杉浦 喜義

〔編注・本稿は、平成27年に行われた

國學院大學学園祭での講演「特攻で散華された先輩、戦友の志」と、平成28年に東京医療学院大学で行われた同じ題名の講演内容を補筆、要約したものであり、公益財団法人水交会の機関誌『水交』平成28年盛夏号及び同年清秋号に連載されたものを、それぞれご了承を得て、転載させていただいた。〕

目次

- 1 はじめに
- 2 帝国海軍の人命尊重と死生観
- 3 体当たり特攻攻撃の開始
- 4 必死の特攻兵器
- 5 第601海軍航空隊 (601空) 攻撃第1飛行隊 (K-1)
- ① 硫黄島上陸作戦時のK-1の戦果
- (以上「前編」『水交』平成28年盛夏号掲載)
- ② 沖縄攻略戦に対するK-1の対応
- ③ 沖縄戦終結後の百里ヶ原基地におけるK-1の状況

④ 東北・関東沖機動部隊に対する攻撃

6 むすび

(以上「後編」『水交』平成28年清秋号掲載)

1 はじめに

本日は関係者の皆様のご尽力で國學院大學学園祭において、「特攻で散華された先輩、戦友の志」と題しての講演をする機会を与えて頂きました事に先ずお礼を申し上げます。

私の略歴は、ご紹介の通りですが、回顧してみますと、事変、戦争に縁の深い世代でした。先ず小学校に入校した時満洲事変 (注1) が起こり、中学校に入校した年に支那事変 (注2) が始まりました。海軍兵学校に入校して8日後に大東亜戦争 (注3) が始まりました。3年の教育が2年4ヵ月に短縮され、昭和19年3月22日に故高松宮殿下の御台臨を仰ぎ、卒業した73期の同期生901名が1年4ヵ月余りで、282名戦死しました。最初の戦死者は候補生として乗艦して戦闘に参加したマリアナ沖海戦でした。艦船乗り組みの同期生は、回天搭乗員として戦死した者もありますが、航空機搭乗員の同期生より戦死者の数が上回っております。ということは、航空機搭乗員は、

昭和20年2月末まで練習航空隊において訓練中で、戦闘に参加していません。4月の沖縄作戦から特攻攻撃にも参加して、終戦の日の8月15日の午前中まで出撃して戦死しております。一部の

人から兵学校出身者が温存されていたという風評も出ましたが、決してそのような事はありませんでした。予科練、予備学生出身の搭乗員に比べ各飛行隊に配属された兵学校等の出身搭乗員は少数で、飛行隊長、分隊長が次々に戦死して若くなりました。戦死した搭乗員の員数は、予科練、予備学生出身の搭乗員が多いので、実情を知らない方からそのような評価が出ましたし、戦闘に従事して生き延びた方からも、やや偏見を交えてそのような意見が出ました。

2 帝国海軍の人命尊重と死生観

フィリピン作戦における神風特攻隊

以後、終戦までに何千機という特攻機の投入や、大和の沖縄への水上特攻作戦等から、帝国海軍は人命軽視の組織であったように考えられてもいます。が、むしろその逆でした。ということからは、艦艇乗組員にしても、航空機搭乗員にしても、一人前にするには時間が掛かります。陸軍のように数が揃えばですが、数が揃わなければ戦力という

ことになりませんので、無駄な死は、徒に戦力低下を招くことになります。

日露戦争の際の広瀬中佐でご存じの旅順港閉塞隊の作戦も、収容の目処が付いて、東郷聯合艦隊司令長官は実施を承認されましたし、大東亜戦争開戦の日のハワイ・パールハーバーに侵入した特殊潜航艇 (正式名称は甲標的以下同じ) の作戦も、収容の目処が付いたので、山本聯合艦隊司令長官は、実施を認められたということです。

兵学校入校以来、生徒時代に戦死を賛美するような教育を受けた記憶はありません。上級生、教官より徹底的に叩き込まれたことは、人格の研鑽、率先垂範、責任感、愛情を持った部下指導等でした。精神教育の基盤は、軍人勅諭でして、五省というのは自己淘汰の反省事項でした。一言で表現するならば、指揮官に相応しい人物に育てる教育であったと思います。

海軍の先輩で死生観を書いておられる方は少なく、昭和20年3月に戦死された山縣正郷海軍大將が、回想録の中に書いておられます。飛び飛びですが引用します。

「軍人において一死奉公というのは、敵と相見え、大砲には弾を装填し、飛行機は爆弾を抱いて出撃する最後の場面に於ける覚悟を言うのである。戦

争に行ったら死ねばよいとの考えで、平時に最善の努力を尽くさず、我儘勝手な行為が有ったとしたら、許すべからざる事である。」

「軍人の任務は、戦いに臨み、敵に当たって勝利を博して、国防を全うするにある。これが為には平素より凡百の苦心を持って勉強に勤め、もって人格を練り、兵術を研究し、戦技の訓練をやらねばならぬ。いよいよ敵と相見えるときは、生死等など念頭におかず、必勝以ってご奉公申すのである。一死奉公は、この永年奉公の最後の一場面に過ぎない。」

「任務遂行中、生死に直面して、死のほうが生より任務遂行の成果大なりと判断したときは、一挙に死を取るべきである。」

この考え方が、口で言ったり、スローガンになったりせずに、海軍軍人の上から下まで浸透していたように思います。

3 体当たり特攻攻撃の開始

昭和19年11月に比島において神風特別攻撃隊の攻撃が始まる以前から、海軍軍人として任務遂行のため、命を顧みず行動された例を説明します。

開戦劈頭の特種潜航艇4隻によるパール・ハーバー侵入も搭乗された方

は、生還など期待せず自分達の死が、軍人のみでなく国民を奮起させ、戦争を勝利に導くであろうことを期待し、願うての行動と思います。

初めての日米海軍の空母対決となった珊瑚海海戦の際、索敵に出た甲飛出身の搭乗員の操縦する1機が敵機動部隊を発見し、触接を続けて、敵の動静を報告し、母艦に帰投中に、攻撃に向かう飛行隊に出会い、「われ反転、誘導する」と電報を発信して、攻撃隊を正確に目標に誘導し、自らは燃料切れで敵艦に体当たり攻撃を敢行して戦死しておられます。

大敗北を喫した、ミッドウェー海戦の際も、第1次の攻撃から帰投し、まだ健在の空母に着艦して、被弾で燃料が漏れている愛機に爆弾を搭載し、微笑を残して発艦し、敵空母に突入して戦死された飛行分隊長もおられます。

昭和19年10月15日には、第26航空戦隊司令官としてマニラで航空作戦を指揮しておられた有馬海軍少将は、少将の階級章を飛行服から剥ぎ取り、双眼鏡に記入されている『司令官』のペンキの文字も削り落として、攻撃隊を誘導する機に搭乗され、被弾した搭乗機を空母目がけて突入させられました。奥様宛の最後の手紙には「体当たり戦法しか効果を上げる手段は無い。上級

司令部に上申しても中々承諾しないので、自分が率先してやって見せれば、必ず後に続くものが出てくると確信する。」というような内容であったとのことでした。当時まだ大西第1航空艦隊司令官は、着任前です。

比島作戦で、神風特別攻撃隊を発動された大西第1航空艦隊司令官は、元々は体当たり攻撃には否定的な考えを持っておられた方で、「特攻は統率の外道である」と言っておられます。米軍が昭和19年10月17日、レイテ湾・モウノスルアン島に上陸を開始しました。第1航空艦隊は、栗田艦隊等の作戦行動を支援する目的で、この作戦に参加していました。当時の第1航空艦隊の兵力は零戦34機、偵察機1機、天山3機、一式陸攻1機、銀河1機、合計40機しかないという状態でありました。

大西司令官は、10月17日にマニラに着任し、19日にマバラカット飛行場に出向き、第201航空隊本部において歴史的な会議



大西瀧治郎第1航空艦隊司令長官

が開かれました。この会議で敵空母を1週間くらい使用不能にして、捷1号作戦を成功させるために、零戦に250キロ爆弾を抱かせて体当たりをやるほか確実な攻撃法は無いと思うが、どうかと提案された。

航空機による体当たり攻撃の創始者、特攻の父とも言われる中将の心中は、苦悩そのものであり、生きている間、戦死した特攻隊員のことを想い、軍令部次長として東京で勤務しておられても独りで官舎住まいを続け、部下が週1回くらいは家庭に帰られてはと勧めても、「特攻隊員は家庭生活も知らないで死んでいったんだよ。」と、涙を溜めて断られたとのことでした。

201空司令は不在で、副長の玉井中佐が会議に出て、大西司令官の提案を受け、最初は司令不在で・・・と回答を渋られたとのことですが、司令には既に話して、了解しているとの司令官の言葉で納得され、教え子である甲飛10期のパイロットに相談されたようでした。23名のパイロット全員が手を挙げて賛成し、その深夜、指揮官となる関大尉に指揮官を引き受けてくれるように相談された時、関大尉は10秒ほど瞑目して眼を開き、是非私にやらせてください、と返事をして引き受けられたとのことでした。大西司令官



関行男大尉

の考えは、参謀長の方に口止めして話されたことですが、「日本には戦争を続ける力は無くなっている。1日でも早く講和に持ち込まねばならないが、今講和など口にすれば内乱が起きかねない。敵に一矢報いて、その機を捕えて陛下から講和をリードして頂く」が日本民族の生きる方策は無い。敵に一矢報いるためには現状では体当たりの特攻戦法しかない」ということです。

有名な従軍記者が、大西司令長官に特攻攻撃で戦争に勝てますか、と尋ねた時、長官は「戦争には勝てないが、彼らの命を捨てての攻撃が、日本民族の命を救うことになるだろう」と答えられたという記事を読んだ記憶があります。

関大尉は、私達42期飛行学生の霞ヶ浦航空隊における教官でした。昭和19年4月に着任した当時は中尉で、常磐線の牛久駅まで迎えに来ておられました。6月に大尉に進級して結婚されたようでした。8月末に私達42期の飛行

学生が実用機課程の百里、筑波、神ノ池、松島等の基地に転動した後、実施部隊に転動されたようで、戦闘機部隊におられたのは、零戦に爆装して、降下爆撃を指導するためであったと思います。専修課程は艦爆でしたから。

敷島の 大和心を人間はば
あさひに匂ふ 山桜花

24名の特攻隊員を4隊に編成し、敷島隊、大和隊、朝日隊、山桜隊と命名されました。

大西司令長官が特攻攻撃の実施を決断されたのは、これ以外に手段はないと考えられたからでした。米軍に本土上陸作戦を実施されたら日本民族が滅亡する。搭乗員が犠牲になるが、米海軍に一矢報いて講和すれば、日本民族の存続も可能であるとの考えを秘めておられたから、特攻は統率の外道であると言いつつも、自身も死に体で、この作戦を行われたと思います。それは終戦の翌日、軍令部次長官舎で割腹自刃され、特攻隊員の苦しみを自分の身に課して武人らしい最後を遂げられています。残された遺書にも指揮官としての苦渋、残った日本人への期待が滲み出ております。遺書の抜粋を申し上げますと、「・・・死を以って部下の

英霊とその家族に謝せんとす。（中略）隠忍するとも日本人の矜持を失ふ勿れ。（中略）平時に処し、猶良く特攻の精神を堅持し、日本民族の福祉と世界人類の和平のため最善を尽くせよ」と書かれています。作戦開始の最初から自刃される最後まで大西中将は、日本民族の悠久を願っておられました。

関大尉も、体当たり攻撃が成功するまでに2回引き返しておられます。引き返す時の心中は、さぞ苦しかったと思います。苦しさを乗り越えて目的を達成するまで続けられたことは、大変な心理的負担があったと思います。遺書には両親へ何も出来なかった不孝をお詫びし、「国の岐路に当たり、身をもつて母艦に体当たりを行い、君恩に奉ずる覚悟です」と述べ、「教え子よ散れ山桜 かくのごとくに」と最後に書いてあります。これは私達42期飛行学生宛のものでしたが、戦後まで私なども知りませんでした。しかし、先輩の遺言は知らなくても、その志を受けて42期飛行学生は僅か4ヵ月半の間に70名以上が戦死しました。大部分が沖縄戦及び終戦直前の関東沖の機動部隊攻撃です。

4 必死の特攻兵器

関大尉も3回目の出撃で、目標の空

母に突入されましたが、練習機でも、実用機でも、生還の機会はありません。特攻攻撃は必死の行動ですが、必死のものとは言えません。必死の特攻兵器は、人間魚雷の回天と搭乗員が操縦する爆弾の桜花、この2兵器の搭乗員は正に必死の攻撃行動でした。

回天は、特殊潜航艇の乗組員として訓練を受けておられた海軍機関学校51期の黒木大尉と海軍兵学校71期の仁科中尉の発案と血書しての上申が採用されたものでした。黒木大尉は回天の訓練中に殉職され、仁科大尉が出撃される時には、黒木少佐の遺骨を胸に抱き、遺志を遂げられました。

米海軍も、この兵器には大きく脅威を抱いていたようで、終戦直後、回天搭載潜水艦の早急な基地帰投命令の要求が出たようです。

桜花も、第一線で活躍している搭乗員の発想が採用されたものでした。昭和19年の半ば頃、死闘を繰り返して



桜花11型

いる第一線の航空部隊では、体当たり攻撃しか優勢な敵機動部隊に有効な攻撃法はない。航空部隊の司令より体当たり攻撃の上申が出ていたとのことだ。そのような情勢の中で搭乗員の発想が生まれたようでした。

桜花は、双発の航空機に吊り下げて進撃し、目標の20〜30海里のところまで母機から発進します。ロケットを噴射して推進します。機首に1トンの炸薬を詰めており、命中すれば効果は大きなものになります。しかし、母機の行動力が制約され、目標に接近前に母機が撃墜される可能性が少なくありません。一式陸攻に桜花を搭載して出撃することには反対された陸攻隊の隊長も、命令を受けては死を覚悟して出撃されましたが、十分な掩護戦闘機が配備されず、母機も桜花も失われたのが沖縄戦開始前の沖縄航空戦でした。

5 第601海軍航空隊(601空) 攻撃第1飛行隊(K-1)

終戦当時私が所属しておりました第601海軍航空隊攻撃第1飛行隊の活躍について話を進めます。

601空は、本来なら空母に乗艦して洋上で活躍するはずの航空隊でしたが、昭和20年当初には、空母を運用する燃料が無く、係留されたまま呉軍港

に所在し、航空隊も基地航空隊に所属が変更されました。その時期に航空隊の首席参謀から601空司令に任命されたのが杉山中佐で、6月に大佐に進級されて終戦後は、戦死者の遺族を訪ねて全国を慰霊のために回られました。

601空に司令として着任された2月12日に、第3航空艦隊司令長官から香取基地に飛行隊を転進との命令が届



第601航空隊攻撃第1飛行隊の搭乗員

き、松山基地の艦爆、艦攻は可動全機直ちに転進、岩国基地の戦闘機は準備出来次第香取基地に進出を指示して、輸送機で木更津の艦隊司令部で寺岡3航艦司令長官に伺候し、その際に、米軍が硫黄島上陸作戦を実施の際は、601空に特攻作戦を実施してもらう事になるとの意向を内示されました。

香取基地に着いて、席の温まる余裕もない翌日から艦載機の空襲を受け、後から転進した零戦隊は厚木基地に着陸して、戦闘体制を調べて途中空中戦をして香取基地に到着しました。

17日に主要幹部を集合して作戦会議を開き、攻撃隊の編成を決め、行動も決定し、18日に特攻攻撃の搭乗割を定めました。攻撃隊の総指揮官の選任に艦攻隊の肥田隊長が先任だからと譲らず、艦爆隊の村川隊長は参加機数が多いからと主張して譲りませんでした。

が、肥田大尉には次の機会にと納得させて村川大尉を総指揮官に任命されました。攻撃隊の搭乗割から外れた搭乗員が次々に参加させてくれと司令のところに陳情に来たのを、まだ次があるからと諭して帰らせ、一段落したのは夜中、そこへ高崎中尉がどうしても参加させてもらいたいと懇請に来られ、残留艦爆隊搭乗員を纏める責任者として残らねばならないと説得して帰され

たとのことです。高崎中尉も沖縄戦に出撃して、真っ先に戦死されました。

(1) 硫黄島上陸作戦時のK-1の戦果

2月19日に硫黄島上陸作戦が始まり、同日10時に特攻作戦が下令され、寺岡司令長官により神風特別攻撃隊第2御盾隊と命名されました。

香取基地から硫黄島まで750海里(1389キロ)、作戦行動距離830海里(1537キロ)で、八丈島を中継基地としました。

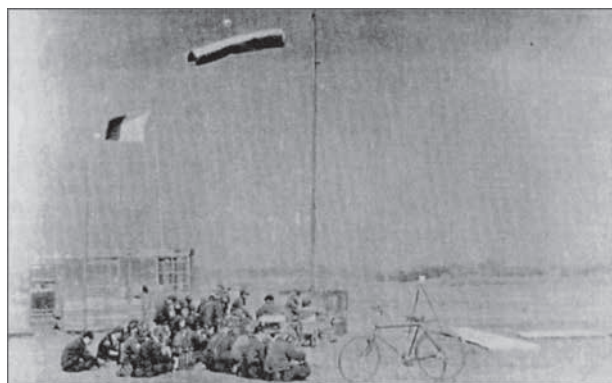
掩護戦闘機も攻撃隊の掩護任務後、体当たり攻撃することを申し出て実行された。3人乗りの艦攻、2人乗りの艦爆も全機搭乗員は所定の配置で搭乗して出撃しました。同じ釜の飯を食べた者が、特攻だからと降りるわけにはゆかぬ、という戦友愛によるものでした。

天候の影響で21日に香取基地を発進し、中継基地で燃料を補給し、12時頃八丈島を発進しました。601航空隊の艦爆連合攻撃隊の攻撃は、周到な準備と旺盛な士気及び天運に恵まれて成功しました。杉山司令の戦果判断「特設空母轟沈、大型空母火炎撃沈確実、戦艦2隻轟沈、巡洋艦2隻炎上、2隻撃破、輸送船4隻以上轟撃沈」。この攻撃は、硫黄島の陸上部隊の士気も鼓

舞する結果となりました。戦果は零戦の確認機によっても報告されております。村川飛行隊長が当時23歳であったと思います。海軍の伝統精神の指揮官先頭、一死奉公を実践されたと思います。

硫黄島攻撃作戦により攻撃第1飛行

601空硫黄島特攻作戦 第2御盾隊編成表（昭和20.2.21）													
備考	第3攻撃部隊				第2攻撃部隊				第1攻撃部隊				隊
小平機のみ父島北方でF6Fの攻撃で被弾、父島に不時着し、後部隊に復帰（右編成表の太字は戦死者を表す）	北爪	池田	川崎	小平	水畑	三宅	小松	大久保	小石	青木	田中	村川	操縦員 偵察員
	圓三二飛曹	芳一飛曹	直飛長	義男少尉	辰雄二飛曹	重男一飛曹	武上飛曹	勲一飛曹	政雄上飛曹	孝允上飛曹	武夫一飛曹	弘大尉	
	牧	小山	小林	新谷	下村千代吉上飛曹	伊藤	石塚	飯島	戸倉	木下	幸松	原田嘉太男飛曹長	
	光廣上飛曹	昭夫上飛曹	善男上飛曹	淳慈上飛曹		正一一飛曹	元彦上飛曹	晃中尉	勝二上飛曹	茂少尉	正則上飛曹		



当時の飛行指揮所、順番を待つ搭乗員と風向を示すT字板が見える

名前がありませんでした。私の記憶では、71期、72期及びベテラン下士官で編成され、沖縄作戦で全員戦死しております。

73期は、当初の名簿には一人も入っていないように思います。名簿が発表された直後頃、601空の彗星隊も香取基地から百里基地に転進してきた、K-1の国安隊長と寺岡分隊長が以前学生舎であった建物の一室を占有して事務室兼寝室にしておられることを知り、お二人とも霞ヶ浦航空隊で世話になった教官でしたので、正確な日付けは忘れましたが、3月12、13日頃の夜挨拶に行きました。その際、百里空艦爆隊の特攻編成から外れていいますので、K-1に引つ張ってくださいとお願ひしました。その翌日には松島基地に99式艦爆で飛行し、数日滞在して19日に百里基地に帰投しました。そこに待っていたのは、K-1への転勤命令の電報でした。20日にK-1へ着任しました。というのは、飛行場を挟んで西側は既設の百里空、東側に601空の新しい施設が造成されていたので、行李を自転車運び、移動できたのです。

現在は百里空の残存施設は、隊門の四角いコンクリート柱と警衛詰め所、百里原神社の本殿のみと思います。



防空壕と整備員

601空の施設のあったところは様変わりで、起伏の多かった地形は平坦になり、航空自衛隊の立派な施設が立ち並んでいます。当時の飛行場は、滑走路は無い芝生で1000メートルの方形の飛行場でした。

601空の施設の大部分は、地形の起伏を活用して半地下式のもので、地上の施設は木造のバラック建築か幕舎でした。私に与えられたのは、半地下式の隊舎の入口にある小部屋でした。4月中旬から5月末までに73期の中尉



飛行作業の合い間に…



南九州に進出前の渡辺隊の搭乗員



南九州に進出前の渡辺隊の搭乗員

が5名になり、小部屋2部屋で起居しました。食事は士官食堂が別に地上に建築されており、朝夕は食堂で食べましたが、昼食は飛行場の指揮所脇の天幕内で弁当でした。生活に必要なトイレ、洗面所、浴室は仮設のものがありましたが、お粗末の限りでした。一応水道は百里空の方から分岐して、ホースで導水してありましたが、浴室の水は、付近の小川から隊員が担い桶で運びました。

格納庫はありませんので、飛行機、

エンジンの整備は全て露天、立ち木を利用して天幕を張り、雨露を凌いでいる状態でした。夜間整備も行っていました。燃料タンク、弾庫はもちろんありません。終戦前の7、8月頃、彗星に搭載する800キロ爆弾が指揮所付近の通路脇の溝に転がっていた光景が目につかびます。

隊舎は、両端が入口で爆風を遮るため屈折しており、内部は左右が狭い2階式の居住区で、硬い藁詰めマットが隊員1人の占有面積で、衣囊その他私物は足元に置く状態でした。入口のみの通風孔で少し、半地下式ですので、隊舎内は湿度が高く、蚤虱の繁殖に最良の環境でした。4月以降、終戦までに毛布を2回か3回大釜で煮沸消毒しましたが、隊員の苦労は想像を絶する

ものでした。私達5名も6月下旬頃、地上に6畳間程の木造バラックへ鉄製2段ベッド3台を入れた隊舎に移りました。私達以外の士官搭乗員は、最初から士官宿舎での生活でしたので、隊員の苦労は知らなかったかと思えます。

(2) 沖縄攻略戦に対するK-1の対応

3月20日に着任し、23日に99式艦爆で整備主任を木更津基地と横須賀基地での会議に参加のための要務飛行を命じられ、K-1での最初の飛行となりました。これが沖縄作戦準備の会議ということは後で知りました。25日には

隊長、分隊長、高崎飛行隊士の動きが慌ただしくなり、顔が厳しい表情に変わりました。26日には南九州に進出する搭乗割りも発表され、28日進出と決まりました。

私は彗星の操縦は未経験ですので、残留となりましたが、26日頃に指揮所で国安隊長から、十分な訓練期間もなく、進出しなければならぬのは残念だ。後3ヵ月訓練の期間が欲しかった。

杉浦中尉が、残留搭乗員をしっかりと掌握して、訓練に励み、後に続いてもらいたい。君がK-1残留指揮官の積もりでやるように、と言われてました。正確な記憶ではありませんが、残留の搭乗員は当時、予備士官数名と下士官等20名弱であったかと思えます。27日の午後、渡辺大尉以下、士官7、8名と下士官十数名が着任され、渡辺大尉が先任者としてK-1を指揮していかれるようになると、安心し、喜んでおりました。翌28日にK-1の彗星20機が500キロ爆弾を搭載して、列線に並んでおり、戦闘機隊の零戦も列線に30機余り並び、進出準備が整っていると、1機の彗星が火災となり、500キロ爆弾が誘爆して死者も出る大事故が生じ、渡辺大尉も顔に火傷を負われ、海軍病院に入院されました。その日の出撃は中止になり、翌日に延期さ

れました。

29日に601空の戦闘機40数機、彗星20機が九州国分基地に向け百里基地を発進しました。30日には司令も国分基地に進出し、601空は宇垣第5航空艦隊司令長官の指揮下に入り、菊水作戦を実施することになりました。杉山601空司令が練習航空隊の艦爆隊の統一指揮をされることになりました。

私は国安隊が南九州に進出した後、高崎大尉から渡された簡単な彗星艦爆のマニュアルをもとに、自学自習で運用法を学び、地上滑走訓練を2、3回行った後、単独で飛行訓練を開始しました。4月、5月と訓練を重ね、彗星艦爆への転換を終えました。

— 次号に続く —

【編注】

注1 満洲事変

昭和6 (1931) 年9月18日

昭和7 (1932) 年2月18日

注2 支那事変

昭和12 (1937) 年7月7日

昭和16 (1941) 年12月8日

注3 大東亜戦争

昭和16 (1941) 年12月8日

昭和20 (1945) 年8月15日

〈講演録〉

特攻で散華された先輩、
戦友の志 (後編)

海兵73期 杉浦 喜義

— 前号から続く —

4月1日、K-1の彗星18機が第1国分基地に勢揃いしました。4月2日敵機動部隊に対し、黎明攻撃が発令され、国安隊長以下ベテラン搭乗員の4機を発進させたが、敵を見ずに帰投しました。このとき出撃された硫黄島特攻作戦参加を懇願された高崎中尉は鹿児島湾で戦死されました。任務が完遂できずに亡くなられたので、心中さぞ無念の思いであった事とされます。

4月3日午後3時に沖縄北端東50海里付近の機動部隊攻撃のため戦闘機40機、彗星19機が発進しました。彗星隊は国安隊長指揮のK-1艦爆隊の全力でありました。国安隊長がエンジン不調で引き返したので、寺岡分隊長が指揮して前進し、攻撃を敢行しました。未帰還機4機、攻撃後喜界島等に不時着した機が8機、寺岡分隊長は未帰還でありました。

4月6日に菊水1号作戦発令、沖縄攻略部隊に対し、空中総攻撃を実施。K-1の彗星4機が機動部隊攻撃に参

進。2機未帰還、2機喜界島不時着。この日に宇佐空、名古屋空、百里空の99式艦爆47機が出撃、輸送船攻撃を実施しました。ほとんどが未帰還で不時着等は数機でした。百里空の99式艦爆の搭乗員は私が学生時代の教官が主力で、海兵71期72期の先輩でした。宇佐空の出撃機には同期生が2人加わっており、未帰還でした。

4月7日に国安隊長機以下11機出撃

第三御盾隊 出撃編成表					
備考	昭20. 4. 2				日付
高崎中尉は鹿児島湾で戦死 (右編成表の太字は戦死者を表す。)	安藤	高崎	倉智	中川	操縦員
	勝一飛曹	孝一中尉	宜明上飛曹	紀雄飛曹長	
	小林	中岡	村滝	国安	偵察員
	久光二飛曹	静夫上飛曹	良吉二飛曹	昇大尉	

この間4月3日に出撃あり (編成表は次頁)

第三御盾601部隊出撃編成表					
備考	昭20. 4. 6				日付
南機は戦艦攻撃後、喜界島に不時着 茅原機は帰途奄美大島に不時着 (右編成表の太字は戦死者を表す。)	茅原	川合	南	杉本	操縦員
	幸蔵飛長	仁少尉	喜市二飛曹	孝雄飛曹	
			鈴木喜久男二飛曹	百瀬	偵察員
				甚吾大尉	

し、全機未帰還となり、K-1の彗星艦爆隊は全滅しました。国安隊長にしても、寺岡分隊長も、編成後1ヵ月未満で搭乗員との意思の疎通も、訓練も不十分な、部下を率いての戦闘で戦死され、さぞ無念な思いであったと思われます。隊長も分隊長も任務遂行第一とし、後に続く者のあることを信じて散華されたと思います。

これらの作戦では、練習航空隊の航法訓練機も使用され、輸送船に体当たり攻撃を計画していました。私の同期生の1人が、徳島航空隊教官勤務をしており、白菊機上作業練習機で大隅半島串良基地より出撃し、エンジントラブルで喜界島に不時着して生還した者もいました。

桜花隊も鹿屋基地に進出し、夜間、黎明の攻撃を単機で実施しており、搭乗員は基地外の小学校を宿舎にしておりました。分隊長の71期の湯之川大尉は、桜花の搭乗員が死を前に生活が乱れていたように言われることは心外だ。彼らは最後まで泰然として、研究を重ね順番を待っていたと言われたことは忘れられません。

百里基地で残留していたK-1の搭乗員も彗星も新着任と補充により逐次増勢され、4月10日ごろ国分基地に第2陣として6機進出させ、4月17日に

昭20.4.3

機動部隊攻撃に出撃して4機未帰還した。

4月下旬に司令は吉富副長に現地の指揮を任せ、残存部隊と共に百里基地に帰投されました。

K-1の新飛行隊長として68期の野村大尉が発令されており、現地で飛行

隊の作戦指揮を執っておられました
が、4月下旬に百里基地に着任されま
した。野村飛行隊長が百里基地に着任
された直後に、海軍病院を退院し帰隊
しておられた渡辺大尉を指揮官に、20
機の彗星を第2次進出部隊として南九
州に派出が決まりました。この隊は第

昭20.4.7

2 国分基地に進出しました。現在の鹿
児島空港です。このときも私は新隊長
を補佐するためにまた残留となりました。
第2次の進出隊員の中には、先に
国分基地に進出して百里基地に帰投し
た搭乗員も含まれておりました。

この隊も5月に機動部隊接近の情報
で、総攻撃が発令され、全機爆装して
列線で待機中に零戦の事故が生じ、攻
撃中止となり、遂に攻撃の機会を失し、
6月下旬に百里基地に帰投しました。

昭20.4.1

(3) 沖縄戦終結後の百里ヶ原基地におけるK-1の状況

5月になり、搭乗員も彗星も急速に増加して、新飛行隊長の下で本格的な訓練が行われることを期待しておりましたが、硫黄島の基地からP-51戦闘機が基地攻撃に来襲するようになり、戦闘機隊が百里基地から三重県の鈴鹿基地に進出展開して基地の防備は対空砲火のみの状態で、空襲の都度撤退せざるを得ない状況でした。

司令は鈴鹿基地に進出され、飛行長は名古屋基地で新たに601空に編入されたK-3を指揮し、吉富副長が百里でK-1を指揮されました。

K-1のように2月から終戦までの



渡辺大尉 (後列中) と鈴木中尉 (前列)



出発前に操縦の中川飛曹長と打合わせる国安大尉 (中央)

6カ月に隊長が3人も代わられ、2回全滅して、搭乗員が次々に補充された飛行隊も少ないと思います。6月に入ると、航空燃料不足のため訓練飛行停止の指示が出ました。試験飛行、要務飛行のみに限定されたのです。搭乗員は指揮所付近で、航法の研究とか攻撃法の座学もしましたが、体力を低下させないように、運動にも努めました。環境の最悪の隊舎、次々に戦友が戦死する中で、ようし次には俺が行き、仇を取ってやるぞという敵愾心に燃える日々でして、搭乗員に暗い表情や不平不満を口にするような者はおらず、搭乗の機会があれば、率先して乗るという雰囲気でした。

7月中旬頃のK-1の兵力は彗星80機、搭乗員が90名ほどであったかと思っています。歴戦のベテラン搭乗員から100時間に満たない新人までいました。隊長もこれらの搭乗員を指導し、隊として纏めるのには苦労されたと思います。

7月20日前後に全搭乗員を対象にした編成が発表されました。隊長直卒の指揮小隊以下、第1から第6までの急襲隊、各急襲隊は4機1個小隊の3個小隊の12ペアーで編成されました。

第1急襲隊は、ベテランを揃え、夜間攻撃隊と位置付けていました。第2

から第6まで70期、71期が急襲隊長で、73期も各1名配されていました。当時搭乗員の中で兵学校出身者は隊長以下12名のみでした。士官は第13期飛行予備学生出身の中尉と少尉で、飛行時間は正確ではありませんが1300〜1500時間程度であったかと思えます。下士官も12期の甲飛の者が多く、飛行時間が当時で、100時間程度であったように記憶しております。体当たり特攻戦法しか効果的な攻撃法が無い技量レベルと言うべきでしょう。K-1としては一応態勢を整え、満を持しておりました。

私のペアーの偵察員も12期の甲飛出身者で、降下爆撃の際は、危険は承知だが投下高度を600メートルから400メートルまで下げると指示していました。戦後早稲田大学を出て東芝に勤め、東海大学でシステム工学の教授から同大学の九州短大の学長に抜擢され、出張先で急病のため逝去されましたが、優秀な人でした。

(4) 東北、関東沖機動部隊に対する攻撃

7月29日に機動部隊が関東方面に接近との情報で、同夜私の属していた第2急襲隊に翌日午前4時から2時間待機の指示が出ました。2時間待機とい

うのは出撃命令が出たら2時間以内に発進できる状態で待機するのです。29日の夜、特別身の回り整理もしませんでした。翌朝待機中に散髪して、遺髪を残し、飛行服姿のネガを要務士に渡して置きました。彼に冗談など言っている時間を過ごしていました。正午に機動部隊の行動不明で待機解除となりましたが、飛行場で弁当を食べた後、芝生に横になったら3時頃まで眠りました。初めての待機で緊張しての疲れからでした。その日宿舎に帰ってから不要なものを行李にまとめたり、両親への遺書を書いたり、覚悟を詠った短歌などを書き残しました。これらも行李に入れ、後日郷里の両親宛に送りました。

8月になると機動部隊の北上の情報もあつたかと思いますが、待機命令は無く、第1土曜には午後から半数の外出が許可されました。このとき同期の平野、水上中尉と13期予備学生出身の小城、勝原中尉の5名で、酒保で調達した1升瓶を持参して水戸まで外出し、1泊して、翌日正午帰隊しました。一緒に行動した5名中私のみが存命し、今日に至りましたが、申し訳ない気持ちと、不思議な運命を感じております。

7月下旬より航空機の使用が制限さ

第四御盾隊 出撃編成表

11

考（氏名の太字は戦死者を示す。）

例にあるように、

昭和20年8月13日	日
------------	---

武	=	平	小	
---	---	---	---	--

考（氏名の太字は戦死者を示す。備

けるようにしておりました。搭載爆弾は800キロ爆弾で、信管は、特攻用で安全解除が操縦席で可能なものでした。中々出撃機が飛行場に現れませんでした。が、11・00頃、3小隊の平野機以下3機と1小隊の小城機が地上滑走をしてきたので、指揮所付近で手を振り、見送りました。指揮所の脇のテントの中で昼食の弁当を食べ終わった頃、

第2急襲隊整列が号令され、型どおり副長の命令を受けましたが、先に出撃した第6急襲隊の4機以降の後続機が出て来ないので、時間の指示でなく、準備でき次第出撃と言われました。星島急襲隊長の「かかれ」の号令で私と

ペアーの道下一飛曹はトラックの荷台に乗り、指揮所から約2キロほど離れた松林の中にある掩体壕の中で準備完了の彗星に向かいました。正確ではありませんが13:00ごろと思います。

飛行場の端の通路をトラックで走っていたら、ロケット弾、曳光弾が松林の掩体壕の中の彗星めがけて打ち込ま

れるのが認められ、トラックを緊急停

車させ、2人は飛び降り、車は全速力で松林に隠れさせました。飛び降りた

2人は飛行場の端に掘られている排水溝に飛び込み、銃撃を避けておりました。2、4機のグルーブの艦載戦闘機が次々と入れ替わりながらの空襲が2時間以上続きました。私は排水溝の中で雲量10の空を眺め、雲底を目測しつつ、攻撃法を考えておりました。敵の

戦闘機に発見されずに目標に接近する方策と、目標を発見したらその攻撃法です。時間が経つと共に雲は低くなって来るし、空襲も終わり、搭乗機のところに行こうかと考えていたら、指揮所の方から伝令が自転車であって、天候不良につき攻撃中止が発令されましたと伝えてくれたので、道下一飛曹とライフジャケットを脱ぎ、とぼとぼ指揮所に還りました。そこで平野機より空母発見の電報が入った事を聞き、自転車で通信室に駆けつけ、レシーバーを借りて信号を直接聞いていましたが、混信が多く私には何も判読できませんでした。宿舎に引き上げて机の上を見たら、平野中尉が部屋を出る前に紙切れに鉛筆で書いた短歌が2首ありましたので、色紙に私が浄書して持っておりました。

愛知県春日井市に長兄ご夫妻が住んでおられ、私が愛知県に帰省した翌年、

墓参に訪問し、遺詠の色紙はお渡しして手許にはありません。

歌詞が判らず残念に思っていました。昨年國學院大學の学園祭で講演した際、講演会企画者が文庫本に編集されていた平野中尉の遺詠を見つけて、講演会後の懇親会の際、渡されました。次に遺詠2首を記載します。

征く人も見送る人も唯一つ

思ひは同じ大君のため

ひたすらにまちわび居りし出撃の

朝ぞ 光は四方に輝く

(注) 昭和殉難遺詠集に平野中尉の辞世として収録されている。

平野中尉とは百里空の艦爆学生が一緒でしたから最後まで冗談を言い合いながら、切磋琢磨しておりました。同期生5名で1戸建ちのバラックで生活していたため、20歳のいたずらっぽい彼の面影は浮かなくなります。平野が第6急襲隊にどくろ隊、私が第2急襲隊に八千代隊と通称を命名し、海賊隊のようだったか、彼女の名を利用してとか冗談を言っていたのです。

小城重細中尉、勝原通利中尉と私生活を共にした時間は、最後に水戸の料亭において懇親会を催した時のみで

した。しかし小城中尉とは何となく気が合い、飛行場でも親しくしておりましたが、個人的なことまでは戦後まで知りませんでした。

戦後刊行された第13期飛行予備学生の手記を編集したものが2種類あります。一つが昭和24年に出た岩波文庫の『きけ わだつみのこえ』。これは意図的に左翼の編集者が反戦的な遺書遺稿を集めたもので、一部改竄も行われたと言われています。生き残った第13期予備学生の同期生と遺族が反発して、白鷗遺族会が編集したものが『雲ながるる果てに』として昭和27年に刊行されました。今は手許にありませんが、後に文庫版として再刊されたものを本屋で見付け、目次を開いて見たら8月13日に戦死した小城中尉の名を発見したので、早速買って帰りました。

第13期飛行予備学生は、昭和18年10月1日に4726名海軍に入隊し、1605名戦死しております。内447名が特攻戦死です。私達が飛行学生のある練習航空隊で教育を受け、少し早く第一線部隊に配属されていたので、飛行時間は私達と大差はないかと思えます。

小城中尉の手記は、
「ただ征かん 生命を受けて二十年
晴れて空へのお召しありせば」

刻々と激しさを増す戦にやむにやまれぬ血に燃えて学業を捨てた君は、今その戦場に発たんとす。一点の雲もない大空 はるかな爆音を残して消え行く機影に 幾たびか固く誓った男子の志を徹するときが来たのだ。何を恐れる事がある。此の世のすべてをたち切った君ではないか。ただ一筋 国を思う熱情の前に何の未練があろう。愛する父よ、母よ、姉妹よ、そしてああ！何とも思わない、考えるな、ただ征け、征つてこの国が、民族が救われるなら。

君思うところはつねにかわらねど
総てを捨てて大空に散らん」

当時22歳でした。当時飛行場では雑談もしていましたが、個人の身上調査的な事を話題にしたことはクラス間でも記憶にありません。

8月13日の11・30頃平野機に続いて800キロ爆弾を抱いて離陸し、鹿島灘沖に向かいました。電報の受信記録も残っておりません。未帰還でした。平静を装いつつ、内面的な苦澁を手記にして、自らを励ましたと思います。私自身の経験もそのようにものでした。

私は7月30日の待機命令の経験で、翌日両親宛の遺書と辞世の和歌を書い

昭和20年8月15日

第四御盾隊 出撃編成表												日
昭和20年8月15日												
弘光	中村	山本	川合	永田	岩谷	大島	高臣	藤本	田上	谷山	俵	操縦員
正治一飛曹	正義一飛曹	好人上飛曹	壽一上飛曹	興四雄一飛曹	樺三上飛曹	芳蔵二飛曹	亮祥中尉	嶺一飛曹	初治一飛曹	春男中尉	良通飛曹長	
泉川	佐々木六郎一飛曹	勝原通利中尉	水上潤一中尉	矢上保一飛曹	溝口和彦一飛曹	相馬八郎少尉	新谷淳慈上飛曹	新井唯夫二飛曹	田中喬一飛曹	田島平三一飛曹	斉藤和也大尉	偵察員
白二飛曹	故障で出発せず。					発動機不調で引き返す。	発動機不調で引き返す。	戦闘機の攻撃を受け本土内自爆		戦闘機の攻撃を受け本土内自爆	発動機不調で引き返し、途中で潜水艦を発見攻撃	備考 (氏名の太字は戦死者を示す。)

水上潤一中尉のご遺族は金沢におられ、戦後文通をして知りましたのは、当時ご母堂と2人の妹さんのみの家族

でした。最後に会われたのは、20年の7月上旬第2国分基地に残してあった彗星を空輸に行く途中、自宅に立ち寄った時と思います。別府の杉乃井旅館で水上と合流し1泊しました際、灯火管制下の暗い大浴場で別府音頭を指導してくれたことは思い出の一つです。

14日は雨で攻撃は命令されず、15日には08・30頃から出撃し、最後の彗星は11・30頃離陸して、霞ヶ浦上空で、見えている距離のところで撃墜され、搭乗員の遺体は収容されました。

正午の陛下の玉音放送は飛行場の指揮所で、拝聴しましたが、内容は理解

K-1の士官の構成は兵学校出身士官12名、予備士官18名、特務士官13名でした。戦死は兵学校出身士官2名、予備士官7名、特務士官0名でした。

出撃機数は、8月9日12機出撃未帰還7機。13日4機出撃全機未帰還、15日11機出撃未帰還8機。合計19機未帰還でした。戦死37名。うち兵学校出身士官2名、予備士官7名、下士官28名でした。年齢は18歳から23歳までの青年でした。

終戦の詔勅を聞いて、私は指揮所脇の芝生で悶々としながら、流れ出る涙を止めることができませんでした。一番繰り返していた想いは、平野も水上も死処を得て戦死したのに俺だけ残ってしまったという慚愧の念でした。

翌日野村隊長から飛行隊搭乗員に可動全機の彗星で硫黄島に特攻をかける
と檄を飛ばされ、搭乗員のみでなく、整備員まで一緒に連れて行つてくださ
いと懇願する状態でした。指揮官の吉
富副長が鈴鹿基地に進出しておられた
杉山司令に連絡され、司令が3航艦司
令長官に状況を確認されて百里基地に

飛んでこられ、「陛下のご命令に背く軽拳は許されぬ。硫黄島に突入すると言うなら、杉山の首を撥ねてから実行せよ。」と総員集合しての訓示があり、隊長の企図は押さえられました。8月中に混乱も無く、百里基地、名古屋基地、鈴鹿基地において復員が実施されました。

6
むすび

海兵73期の同期生の戦死者数は282名ですが、艦艇乗組みの者が176名、航空関係者が106名で、その中には事故での殉職も約30名含まれます。艦艇関係の戦死者は昭和19年内が大部分で、昭和20年3月以降は動く艦が少ないので戦死者も減りました。航空関係者は、昭和20年3月以後、4月、5月及び8月に集中しており、ます。回天で8月11日に戦果を上げて戦死したクラスもいます。

平生の言葉の中に国のためとかいうようなことは、話題にならず、若者らしい闊達な明るい話題を楽しんでいたのですが、靖国神社のみでなく、旧兵学校の参考館、鹿屋の航空史料館、土浦の予科練記念館に保管されている戦没者の遺書等を見て、これが20歳前後の青年の書いたものかと感激させられると共に、共通している事は、両親に

に対する感謝とお詫びの言葉、掛け替えない命を国に捧げることの誇りが読み取れます。国と一言に申しましたが神代より今日まで続く天皇に象徴される日本民族のためであることは当然です。

関大尉の遺書に「教へ子よ 散れ山桜 此の如くに」とありましたように、後に続く者のあることを信じて、総ての英霊は突入されたと思います。K-1の初代隊長村川大尉にはお目にかかった事もないので、お人柄は知りませんが、前任の肥田艦攻隊長と指揮官を競われ、艦爆、艦攻、戦闘機の指揮官としての出撃に、攻撃の成否の心配はあったかと思いますが、誇りを抱いて突入されたことと思います。当時22

〜23歳でした。この攻撃は、関大尉の攻撃の戦果と共に初期の特攻攻撃成功の双璧ではないかと思えます。沖縄作戦では陸海合わせて2000機以上の特攻機が投入されましたが、米軍の資料によりますと艦艇の被害は、日本側の発表より大分低いものですが、乗組員に与えた精神的負担の方は、機動部隊指揮官に悲鳴を上げさせるほどの成果を上げています。

沖縄戦に出撃の前、国軍隊長が、編成してまともな訓練も終わっていない部下を率いての戦闘参加に「後3ヵ月

訓練したかった。杉浦君、後は頼むぞ」と言われた言葉は、今も鮮明に脳裡に刻まれています。寺岡分隊長は、厳しい教官で決して無口ではありませんでしたが、出撃を控えて緊張しておられた事は窺えましたが、国軍隊長と同じ無念さが感じられる表情でした。私が艦爆の課程に進んだのも寺岡教官の影響によるものでした。口には出されませんでした。隊長と同じく後は頼むぞ、と態度で感じました。

戦後第3急襲隊の渡辺大尉を中心として、生き残りの隊員や遺族で毎年靖國神社に昇殿参拝して神風特攻隊第2御盾隊、第3御盾隊始めK-1の戦没者を追悼してきました。終戦60周年で隊員も高齢化して参加者も減りましたのでK-1会として参拝は終わりにし、7月のみたま祭りにK-1会の献灯を奉納しました。昇殿参拝の期間中に、野村隊長も2回金沢から参加され、慰霊祭を挙行了しました。懇親会で話題になる事は、当時死ぬことが恐ろしいと思ったことは無かったね、ということでした。生身の短い個人の命は消えても、日本民族の悠久の命の中に生き続けることを無意識のうちに持っていた事に拠るものではないかと思えます。危険と背中合わせの飛行訓練のうちに、そういうものが培われたと思

ます。

7 おわりに

戦争を賛美するものではありませんが、民族の命を維持するためには戦わねばならないことがある。そのためには、個人の命も犠牲にせざるを得ないことを皆様とほぼ同じ年齢で戦死された英霊に代わりお話しいたしました。平和は有り難いものですが、無為にして得られるものではありません。

2676年の輝かしい伝統を持つ国体と、世界に比類なき平和愛好の日本民族を押し潰そうという脅威がひしひしと足元に迫っています。今こそ皆さんの世代の方が覚悟して英霊の期待に応えていただきたいと思えます。

長時間のご清聴を感謝してこれで終わります。有り難うございました。

— 完 —

（杉浦喜義 海兵73期元佐世保総監）

【編注1】

特攻戦死者のお名前は、財団法人特攻隊戦没者慰霊平和祈念協会（現公益財団法人特攻隊戦没者慰霊顕彰会）刊『特別攻撃隊全史』と整合の上、他の資料で補完した。資料により新旧字体が競合する場合には旧漢字を記載した。

【編注2】

本稿は、平成27年に行われた國學院大學学園祭での講演「特攻で散華された先輩、戦友の志」に、翌28年に東京医療学院大学で行われた同じ題名の講演内容を補筆、要約したものである。

（別添第1）

大西瀧治郎海軍中将の遺書

特攻隊の英霊に白す
善く戦ひたり深謝す

最後の勝利を信じつつ肉弾として散華せり然れ共その信念はついに達成し得ざるに至れり

吾死を以て旧部下の英霊と其の遺族に謝せんとす

次に一般青壮年に告ぐ

我が死にして軽拳は利敵行為なるを思

ひ

聖旨に副ひ奉り自重忍苦するの誠とも

ならば幸なり

隠忍するとも日本人たるの矜持を失ふ

勿れ

諸子は國の寶なり

平時に處し猶ほ克く特攻精神を堅持し日本民族の福祉と世界人類の平和の爲最善を盡せよ

海軍中将 大西瀧治郎

(別添第2)

関行男海軍大尉の遺書

父上様、母上様

西条の母上には幼時よりご苦勞ばかりおかけ致し、不幸の段、お許し下さいませ。

今回帝國勝敗の岐路に立ち、身を以て君恩に報ずる覚悟です。武人の本懐此れにすぐるものではありません。

鎌倉の御両親に於かれましては、本当に心から可愛がっていただき、其の御恩に報ずることも出来ず征く事を、お許し下さいませ。

本日帝国の為、身を以て母艦に体当
を行ひ、君恩に奉ずる覚悟です。

皆様御体大切に
満里子殿

何もしてやる事も出来ず散り行く事は
お前に対して誠にすまぬと思つて居
る

何も言わずとも 武人の妻の覚悟は
十分出来ている事と思ふ 御両親様に
孝養を専一と心がけ生活して行く様

色々と思ひ出をたどりながら出発前に記す

恵美ちゃん坊主も元気でやれ
教へ子へ

教へ子よ 散れ山桜 此の如くに

(史料)

六〇一空第一飛行隊子一編成表

（注・著者保存の史料から、一部を抜粋した。）

攻擊第一飛行隊配置表

[illegible]

世田谷山觀音寺

特攻平和觀音月例法要報告

(毎月18日14時より境内の特攻観音堂において執行、参加自由)

平成28年7月18日(月)月例
法要

事務局員 池田 康博

世田谷山観音寺と特攻観音堂

世田谷山観音寺は、地下鉄メトロ半蔵門線「三軒茶屋駅」から歩くこと17分（東急バス目黒行きで約10分、世田谷観音前下車）、東急東横線の「学芸大学駅」とのほぼ中間点にある。

仁王門を潜つて本堂の左奥に「特攻観音堂」がある。かつて華頂宮家の持念仏堂であつたという小さなお堂には、菊の御紋章が入つた厨子の中に二体の特攻平和観音像が奉安されている。その胎内には、陸軍では、航空機に加えて空挺、㊦、戦車等により、海軍では、航空機の他、特潜、回航、震洋等により特攻、戦死された全ての英霊の霊魂がそれぞれに奉蔵されている。

境内には、池中の夢違観音菩薩像、特攻平和観音の石碑、吉田茂元首相の揮毫になる「世界平和の礎」の石碑、神洲不滅特別攻撃隊の碑、あ、特攻勇

士之像などもあって、正に特攻隊戦没者の聖地に相応しい場所である。

月例法要

7月18日、この日は月例法要の日、月曜日とはいえ、「海の日」で、3連休日の3日目にも関わらず、子供連れを含む28名の参列者で、小さな特攻観音堂は一杯となった。

定刻の14時、賢照山主と恵順住職による読経が始まった。私も読経に合わせて、参列者と一緒に般若心経を、続いて特攻平和観音経を讀誦し、御霊の安らかなること、我が国の平和が続くことを祈った。

この特攻平和観音経では、大東亜戦争が、米・英・蘭等に植民地支配されていたアジア諸国の解放、独立に繋がったことを勲績と讃えており、私達がこのお経を唱えることによって、せめてもの慰霊となればと心から思う。

約20分ほどで法要は終わり、恵淳住

直会にて

直会は、境内に移設されている旧小田原藩代官屋敷の本坊で行われた。参加した21名を前に、藤田理事長の発声による献杯の後、恵淳和尚が、「直会に初めて参加した方、又は久々の方はどうぞ何なりとお話を」という言葉に

促されて、台湾出身で、信用組合「横浜華銀」の理事長も務められた会員の呉正男氏から次のような話があった。

同氏は、中学生で内地（日本）留学をしたこと。敗色の濃くなった昭和19年に陸軍特別幹部候補生に志願して水戸陸軍航空通信学校に入隊し、特攻にも志願したこと。終戦時は、北朝鮮にいたため、ソ連に2年間抑留されたこと。日本に復員後、台湾の官吏をしていた父親に連絡したところ、丁度、中共軍との戦いに敗れた国民党軍が台湾に入ってきた、親日派や反共分子を大量粛清・虐殺した昭和22年の「二・二八事件」の直後でもあり、戒厳令下にあることから、「危ないから帰ってくるな」と言われ、日本に残って進学することにしたことなどを話された。

また、台湾人も日本人として一緒に戦い、多くの戦死者を出したにも拘わらず、台湾人の慰霊碑が日本に1箇所（注）しかないのは淋しいとも言われたのが印象的であった。

このように、呉氏の、正に生と死が紙一重という、戦中から敗戦時までの話に加え、台湾出身でありながら日本の軍人となり、特攻まで志願されたことに畏敬の念を抱いた。また同氏は、台湾での「NHKのど自慢大会」の実現のため、署名運動や陳情等に尽力し、

遂に実現されたとのことである。

その後、賢照山主の終戦秘話や望月氏による戦時歌謡の紹介等々、貴重なお話が拝聴できたひと時であった。

おわりに

「君のため何か惜しまん若桜

散って甲斐ある命なりせば」

昭和20年2月19日、東京上空でB-29に体当たり特攻をして散華された、飛行第53戦隊震天航空隊の山田健治伍長（少飛13期、21歳）の遺詠である。

僅か20歳になるかならぬかの多くの若者が、祖国の存亡を賭けた戦争に、御国のため、父母のため、「必死」の攻撃を行ったことを思う時、徒に馬齢を重ねた私は言葉もない。ただその事実と、散華された特攻隊員を忘れないこと、そして、後世に伝えることのみが、英霊に報いる道であると思うのである。

世田谷山観音寺の境内では、今年もNPO法人により、「天空に散りゆく」という、神洲不滅特別攻撃隊に因んだ奉納舞台劇が再演される。このような企画もまた、英霊の供養と語り継ぐということに大いに寄与することと思

注・台湾人戦没者慰霊碑は、東京・奥多摩町のJR奥多摩駅から西東京バスで峰谷バス停下車、徒歩約

25分の所にある。

平成28年8月18日(木)月例法要

会員 倉形 寛

今月の月例法要当日は、天候が非常に不安定であり、雷を伴う大雨が降ったり止んだりであったが、法要には12名が参列した。法要は定刻に始まり、読経の最中にも雷鳴が幾度か響いたりしたが、滞りなく執り行われ、20分ほどで無事終了した。

その後、直会となった。法要参列者がそのまま移動し、参列した。当日は人数も少なかつたためもあり、山主、御住職からの法話はなく、参列者全員が一言ずつ発言する形式となった。

まず、岩崎副理事長から副理事長就任の挨拶があり、引き続き「先輩たる英霊に献杯」というご発声により献杯を行った。石井事務局長から「人間爆弾桜花」特攻を命じた兵士の遺言」という海軍神雷部隊桜花隊に関するフランス映画と、出演されている元神雷部隊隊員であり、戦後は航空自衛官でもあった林富士夫氏の略歴について紹介があった。なお、NHKでは「桜花」開発に携わった太田正一海軍少尉についてのドキュメンタリーを制作し

ているので（昨年2回、本年2回放送予定）併せてご覧になると良いと思われる。

廣嶋会員からは、世田谷区立平和資料館の展示について、戦時中の世田谷区学童疎開関連資料が乏しいとのことのお話があった。このような関連資料に限らず、後世に伝える資料となるべきものを所有している方も少なからずいらっしゃると思うが、高齢になられた現在、家族に申し送るのが良いのか、「平和資料館」のような施設に寄贈し、恒久的に保管・展示してもらうのが良いのかを検討すべき時が来ているものと考ええる。

大穂顧問から、宮崎特攻基地慰霊祭において、小学生も参列して式典進行に係わっていた事実と、会報『特攻』第111号掲載の岩崎副理事長による「知覧特攻基地戦没者慰霊祭参列報告記事」の中の宮崎県の中学生に関わる記述と一致する点があり、感銘を新たにされたとのことのお話があった。このお話を受けて、岩崎副理事長から戦没者慰霊祭等の式典には自衛隊員はもとより参列の御遺族も第二、第三世代に交替しつつあるが、歴史教育についても、明治以降の近代史を教えるべきで、今ようやく良い方向に向かいつつあるのではないか、との認識をしていると話

された。

今回の記録担当(倉形)からは、林富士夫氏と国民歌謡(軍歌)「同期の桜」との関係と、日本国内における「桜花」研究の第一人者である現職海上自衛官の話、及び会報「特攻」第111号掲載の飯田評議員による「ソ連とドイツにも特攻隊はあった―身を捨てて国を護った若者の情熱―」の記事に関連して、エル・アラメインの戦いで、英機甲師団戦車隊に地雷と火炎瓶を抱いて体当たり攻撃を敢行、全滅したイタリヤ軍ファルゴレ空挺師団の例を挙げ、古今東西、大東亜戦争における我が特攻隊のような部隊は存在したという発表をした。また、この「空挺師団」のことにも関連して、飯田評議員から、当顕彰会の前身・財団法人特攻隊戦没者慰霊平和祈念協会が平成20年に刊行した『特別攻撃隊全史』では、薫空挺隊と高千穂降下部隊は特攻認定されていないので、準特攻として扱われているが、平成23年2月10日発行の『特別攻撃隊全史追補版』では、「特攻認定されていることが明らかになった」として、訂正の上、それぞれの名簿が掲載されている。特にフィリピン・レイテ島ブラウエン飛行場に強行着陸し、全員戦死した薫空挺隊隊員には台湾出身者が多い旨の発言があった。

台湾出身の呉正男会員からは、台湾出身戦没者の慰霊碑が、東京・奥多摩湖(小河内ダム湖)畔にしかなく、残念だとのお話があった。また、台湾は日本人戦没者の慰霊碑を建立して祀ってくれているので、日本も同様に台湾出身戦没者をもつと祀るべきであると話された。台湾出身戦没者慰霊碑については、古いところでは、広島市の比治山陸軍墓地の供養塔と、新しいところでは、沖縄県摩文仁の「台湾之塔」が現存する。

今回は、参列人員数こそ少なかったが、直会ではかなり内容的に濃く、意義のある発言、発表が多かった。

平成28年9月18日(日)月例法要

理事 水町 博勝

今回の法要参列者は19名、直会参加者は16名。境内には、来る22日の年次法要の天幕9張りの支柱が、設営予定の位置に置かれて準備が進められていました。今回は、杉浦喜義氏(海兵73期、元海上自衛隊佐世保総監・海将)が出席される予定で、國學院大學の学園祭において講演された「特攻で散華された先輩、戦友の志」(水交会の機関誌「水交」)に掲載された同氏の講演

要録)と題する資料が参加者に配布されました。これを基にお話を伺う予定でしたが、残念なことに、体調不良のため欠席とのご連絡がありました。

藤田理事長から、杉浦氏は戦時中、パイロットとして色々な機種に搭乗し、経験豊富、特攻の様子も掲載文から読み取れるので、是非参考にしてもいい旨の紹介がありました。

また、御遺族の廣嶋氏からは、宮城県の高華山沖で、特攻出撃・散華された兄上・忠夫氏の艦上爆撃機「彗星」を見送った杉浦中尉から「帽振れをしながら見送った兄上の機体は、松林すれすれに飛び立って行ったよ」と聞かされたとの思い出話がありました。また、杉浦氏はK-1(601空・攻撃

第一飛行隊)唯一の生存者であり、当時の杉浦氏と兄上が写っている茨城県百里航空基地飛行隊当時の集合写真等の資料も開陳され、お目に掛かったら伺いたいことが色々あったと、とても残念がつておられました。

小生も、元桜花隊第三分隊長・湯野川守正(海兵71期、湯川れい子さんの兄上)の話が参考資料に書かれていたので、鹿屋基地の往時の様子を伺いたいと思っていました。湯野川氏には戦後、航空自衛隊の峰岡山レーダーサイト長であられた当時、部下としてお仕

えしましたが、その後何度かお会いしても戦中の話は全くされず、今回桜花隊の分隊長をされていたと知ったからです。

今回初めて月例法要に参列された方は4名でした。親子で参列された方は、杉浦氏と同期の故吉沢カズオ氏の奥様とご子息で、ご主人が戦争の事は何も語らなかったこと、水上機の操縦をしていて、多くの戦友を見送ったこと、生前は単身で靖國神社へのお参りを欠かさなかったことなど、思い出話をされました。

当顕彰会の会員で双子の渡辺姉妹は、仕事の関係で、平日はなかなか参列できなかったが、今回は日曜日なので初めてお堂内にお参りできて感無量との心境を語られました。また、特攻をゲリラやテロリストと同一視する者がいるとのことのお話もありました。

石井事務局長からは、4日後の年次法要(当顕彰会が全面支援)の準備状況について、現在約220名の参列申込者があり、当日受付分約30名の見込みを加えると、約250名の規模となり、台風等の天候も心配される中、準備に怠りがないようにとの説明がありました。

先の大戦の軍人は、戦友・同期生とは当時の思い出を語り合うが、関係し

ない者や親族には、何があったのか、何をしてたのか、全く語ろうとしなかった人が多く、小生の父もそうでした。敗戦という悲惨、無念の思いは自分だけに留めておきたかったのでしょうか。杉浦氏のように、特攻任務に就く飛行部隊での体験を、後世に有りのまま語ってくださることは、今後特攻隊員の慰霊・顕彰の資としても貴重なものであります。杉浦氏のお話を直に伺えなかったことは残念でしたが、講演の資料を得たこと、それに関わる方々のお話を伺えたことは、今月の月例参拝の収穫でした。

事務局だより

①天一號にぎり

去る8月2日(火)夕、全体会議の委員有志による当顕彰会前事務局員金子敬志さんの送別会と新事務局員池田康博さんの歓迎会が飯田橋駅前の料理店で行われたが、その席上、原知崇さん(甲飛喇叭隊第11分隊長)から、かの天一号作戦で沖縄に向かう戦艦大和で最後に供食されたという戦闘食の塩にぎりの紹介と、それを生存者の記述から再現した現物の提供があった。一同で試食したが、さっぱりした塩味で、

美味しく頂いた。しかし、これを最後に食した乗組員達の心情に想いを馳せ、感無量であった。

次の一文は、この塩にぎりを再現した作家で、軍事評論家でもあり、食品衛生責任者の資格も有する青山智樹氏の紹介文である。

一九四五年四月六日、沖縄に向けて出撃した聯合艦隊第二艦隊旗艦「大和」で提供された昼食である。

戦時だろうと、平時だろうと、食事の献立は一週間分がまとめて立てられ、主計長、軍医長、副長の裁可得て決定される。主計科は経理や被服の他に食糧も担当しており、食事の内容は、仕入れや旬の食材などによって変化があるため、調理担当の関与は当然である。軍医は栄養面から食餌が適切かどうかを判断する。副長は艦の状態のすべてを把握する義務がある。もつとも、予定と仕入が違ってくるのは避けられないため、烹炊員長の判断で随時、変更されたようである。一方、戦闘が予想される場合、決裁は艦長が行う。

戦闘の場合、食餌は原則として握り飯になり、第一戦闘食から第五戦闘食までの配食法、喫食法が指定されている。名称はものものしいが、第一は「戦闘が予想されるが事態が逼迫していない」時のための配食で、各部署から当

番兵が烹炊所に来て握り飯で受け取り、居住区で食べる。居住区は持ち場に隣接した場所に置かれており、兵は五分以内に戦闘配置につけるように訓練される。

数字が大きくなるほど、状況が悪い想定をしており、戦闘が激しくなると主計科から配食要員を走らせて握り飯を配り、配置の兵は持ち場で握り飯を頬張る。最悪の状態である第五では烹炊所での煮炊きも不可能、主計科員も多数が戦死した状態を想定し、限られた烹炊員が缶詰、乾パンなどを随時、適切な場所に置いておく。兵は合間を見はからって食餌を取る。

第二艦隊、最後の食餌となった大和の昼食は「主計科員が配り、兵は戦闘配置で食餌する」という過酷な状態であったようである。吉田満『戦艦大和ノ最期』にも配食に來た烹炊員が敵機の機銃掃射に倒れて食缶から握り飯を飛び散らせて絶命している光景が描かれている。

四月六日、第二艦隊は午前中に米機動部隊に発見されるが、本格的な攻撃は正午以降となる。

この時の昼食を再現したのが『天一號にぎり』である。単純に握り飯と言っても、海軍の主計参考書などに混ぜ飯の握り、海苔を巻いた物、ゴマをまぶ

した物などが記載されているが、この時は多くの証言で「銀シャリの握り」であったとされている。

当時の日本人には銀シャリは最上のご馳走であり、大和ではないが銀シャリが食えるかと判ると乗員一同、万歳三唱したなどという逸話も伝わっている。

これらの握り飯は米が熱いうちに烹炊員が手で握っていた。海水につけた軍手で握っていたが、すぐに熱さで火傷したようになったという。大和、沖縄特攻時乗員数三五〇〇人、一人あたり三個ずつ、延べ一万もの握り飯をおおよそ一〇〇人の主計科員で握る。主砲が射撃しようが、艦が魚雷を食らおうが、気にかけている余裕はない。配食が遅ればそれだけ乗員の士気にかかわる。

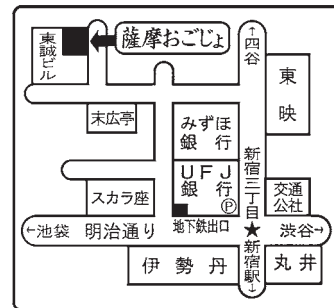
塩水につけた軍手で握っていたのであれば、塩気は充分だったろうが、気になるのはおかずである。「牛の大和煮」という記述と「たくあん」という記述が混在している(最近になって「ゆで卵がついていた」との証言も見つかった)。

これらとは別に夕食が「赤飯の缶詰と、大和煮の缶詰」との記録もあり、昼食は沢庵か大和煮かは夕食の献立が混乱して伝わった可能性が出て来た。そこで今回は竹皮包みにそのまま塩むすび、沢庵、とした。(以下略)

②「特攻の母」の孫・赤羽潤さんと「薩摩おじよ」

平成28年8月29日(月)、30日(火)、9月1日(水)〜3日(土)付け夕刊読売新聞のコラム「しあわせ小箱」欄に「特攻の母」の孫※1〜5として、新宿の料理店「薩摩おじよ」の店主赤羽潤さん(当顕彰会会員・知覧特攻資料館特任館長)に関する記事が連載された。ご承知のとおり、赤羽潤さんは、知覧の特攻の母と慕われ、戦死した特攻隊員の慰霊顕彰に生涯を捧げられた

鳥濱トメさんの二女で、知覧高女「なでしこ隊」の隊員として特攻隊員の世話をした、礼子さんの長男である。「薩摩おじよ」も、当会会員



しあわせ小箱

「特攻の母」の孫 ※1

「高屋敷」を営み、隊員「お母さん」と慕われていた。礼子さんが、女学生だった礼子さんが、妹のう

「特攻の母」の孫 ※1
「高屋敷」を営み、隊員「お母さん」と慕われていた。礼子さんが、女学生だった礼子さんが、妹のう

「高屋敷」を営み、隊員「お母さん」と慕われていた。礼子さんが、女学生だった礼子さんが、妹のう

しあわせ小箱

「特攻の母」の孫 ※2

「高屋敷」を営み、隊員「お母さん」と慕われていた。礼子さんが、女学生だった礼子さんが、妹のう

「高屋敷」を営み、隊員「お母さん」と慕われていた。礼子さんが、女学生だった礼子さんが、妹のう

「高屋敷」を営み、隊員「お母さん」と慕われていた。礼子さんが、女学生だった礼子さんが、妹のう

しあわせ小箱

「特攻の母」の孫 ※3

「高屋敷」を営み、隊員「お母さん」と慕われていた。礼子さんが、女学生だった礼子さんが、妹のう

「高屋敷」を営み、隊員「お母さん」と慕われていた。礼子さんが、女学生だった礼子さんが、妹のう

「高屋敷」を営み、隊員「お母さん」と慕われていた。礼子さんが、女学生だった礼子さんが、妹のう

しあわせ小箱

「特攻の母」の孫 ※4

「高屋敷」を営み、隊員「お母さん」と慕われていた。礼子さんが、女学生だった礼子さんが、妹のう

「高屋敷」を営み、隊員「お母さん」と慕われていた。礼子さんが、女学生だった礼子さんが、妹のう

「高屋敷」を営み、隊員「お母さん」と慕われていた。礼子さんが、女学生だった礼子さんが、妹のう

しあわせ小箱

「特攻の母」の孫 ※5

「高屋敷」を営み、隊員「お母さん」と慕われていた。礼子さんが、女学生だった礼子さんが、妹のう

「高屋敷」を営み、隊員「お母さん」と慕われていた。礼子さんが、女学生だった礼子さんが、妹のう

「高屋敷」を営み、隊員「お母さん」と慕われていた。礼子さんが、女学生だった礼子さんが、妹のう



文・宇都宮子

③台湾の国家人権博物館

7月18日の世田谷山観音寺の特攻平和観音月例法要に参列した際、台湾出身の呉正男会員から、戦後の台湾における国民党軍の親日台湾人と反党分子に対する弾圧や蒋介石、蔣経国父子総統による戒厳令下の弾圧は酷かったという話を伺って帰宅したところ、学生会（旧帝大の七国立大学の同窓会）から『學士會会報』第九一九号（平成28年7月1日発行）が届けられていた。ざっと頁を繰って見ていると、「会員ひろば」の欄に「台湾の国家人権博物館を見学して」という投稿文が目に残った。呉氏の話に関連するところがあるので、参考までに、次に紹介させていただいた。

台湾の国家人権博物館を見学して

三井 良訓
(東北大・経・昭53卒)

先日、台北市の隣、新北市新店区にある国家人権博物館に行ってきました。いっしょに台湾旅行をした人達の中に小林正成さんという老人がいて、自分の写真が人権博物館に飾られているのを見に行くということで、同行させてもらったのです。この博物館は、昔

政治犯を収容していた監獄を開放して人権侵害があった歴史を広く知ってもらうと台湾政府が設けたもので、入場料は無料です。

中を案内していただいたのは、小林老人の友人でもある蔡焜霖さんでした。蔡焜霖さんの兄さんは、蔡焜燦さん、といって司馬遼太郎が「台湾紀行」の取材旅行をした時、台湾を案内した人で作品の中に「老台北」というニッケネームで登場する有名人です。

台湾は、第二次世界大戦後、蒋介石と蔣経国父子による台湾支配が続き、一九四九年から一九八七年まで三十八年間、世界最長の戒厳令がしかれていました。その間、多くのエリート達が政治犯として、投獄されました。政治犯の大多数が軍人でなかったにもかかわらず、軍事法廷で裁かれて命を失っていったのです。

博物館に入って直ぐの所に死刑判決を受けてなくなった政治犯のネームプレートが、延々と並んでいます。私が「こんなにたくさん」と驚くと、台北市内だけでも数カ所の政治犯専用の刑務所があって、その一つは私が台北に行くと泊まるホテルの敷地になっていると教えられて絶句してしまいました。

案内してくださった蔡さんご自身

も、高校生の時に先生に誘われて入ったごく普通の読書会を密告されて、今は緑島と名前が変わった孤島の監獄に十年間収容されていました。牢獄には台湾大学の教授も多数収容されていて、勉強も教わったそうですが、拷問や強制労働をさせられ、大変ご苦労されました。

博物館には、小林老人の写真と大きな紹介プレートがありました。小林さんは、会社の経営者でしたが、昭和四十七年に台北市で、台湾人に頼まれて台湾の民主化を要求するビラを気球に積んで上空からばらまきました。逮捕されて四ヵ月政治犯として投獄されましたが、獄中で知り合った政治犯から手紙と政治犯のリストを頼まれ命がけで持ち帰り、ニューヨークタイムスに発表して多数の政治犯の命を救ったと、紹介文に書かれていました。

当時、NHKのニュースで放映されたそうですが、私は高校生で国立大学を受験しようとして勉強していました。しかし台湾に戒厳令がしかれていたらと習いませんでしたし、小林老人の事件も記憶にありません。

博物館の中には、軍事法廷も保存されています。その法廷に台湾では有名な美麗島事件の裁判の写真が飾られています。美麗島事件とは、国民党の一

党独裁時代に、民主化を求めて政党を結成した人達が裁かれた事件です。その人達が作った民主進歩党が、今年一月の選挙で、国民党を破り国会である立法院の第一党になり、政権を担うことになったのですから、台湾の歴史の変化を感じました。（中略）

事務局からの報告等
寄附者御芳名（敬称略）

（平成28年7月1日～9月30日）

（単位千円）

三〇	呉 奈々子	二五	降矢 達男
二〇	山根 秋男	一七	津田 治男
一二	杉山 蕃	一〇	市川 雄一
一〇	松本 司	一〇	百目鬼 清
一〇	大穂 利武	一〇	萩野 茂雄
一〇	西川 順芳	一〇	河野 茂義
一〇	鮫島美知子	七	西村 米子
七	幸野 聖子	七	大坪万里子
六・二三	加藤 千佳		
五・六五	高山 友二		
五	臼田 智子	五	齊藤 達人
五	飯田 雍子	五	飯田 正能

會員計報
(敬称略)

当顕彰会は、先の大戦において、

祖國の安泰を願ひ、家族や大切な人たちを案じつつ、自らの命を犠牲にして、それらを護ろうとする。若い特攻隊員たちの御霊を慰霊し、感謝することを目的とする団体であります。

私達は、彼らからその精神を学び、自分たちの生き方を考え、より良い社会の実現に寄与したいと活動が続けております。ご賛同の上、ご入会くださるようお願い申し上げます。

○当顕彰会の沿革

昭和34年5月前身の特攻平和勸
音奉賛会が全国組織化
昭和57年6月特攻隊慰霊顕彰会

發足

初代会長 竹田 恒徳 元宮様

二代會長 瀬島 龍三氏

平成5年11月財団法人認可

財団法人特攻隊戦没者慰霊平和

三友會
日本赤十字會
重慶市

祈念協會

三代会長 山本 卓眞 氏

平成23年1月公益財団法人認定

公益財団法人特攻隊戦没者慰霊

顕彰会

現理會長 杉山 泰三氏

○ 現理事長 藤田 幸生 氏
○ 当頭形会 三 幸生 氏

○当顕彰会の主な事業
寺文縁故者への慰霊頒給

・特攻隊戦没者の慰霊顕彰
誌の発行

・ 廣報誌等の発刊
・ 演會等の開催その他

- ・講演会等の開催その他

○年会費
一般會員
3000円

	学生会	一般會員
入會費	100円	300円
年費	0円	0円
出版料	0円	0円
合計	100円	300円

・学生会員 1000円

東京102100
都02100
千代田0073
区00
九段3
比1
3111

東京都千代田区九段北3-11-1
青國神社遊就館内 公益財団法人

靖國神社遊就館内 公益財団法人
寺家銭込者慰霊顕彰会事務局

特攻隊 遺老 慰霊 顕彰 会 事務局
電話 03-1521-3145 94

F	電
A	
X	話
0	0
3	3
1	1
5	5
2	2
1	1
3	3
1	1
4	4
5	5
9	9
6	4

F
 A
 X
 0
 3
 1
 5
 2
 1
 3
 1
 4
 5
 9
 6